

外環状道路関係文化財発掘調査報告書19

寺 島 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第753集

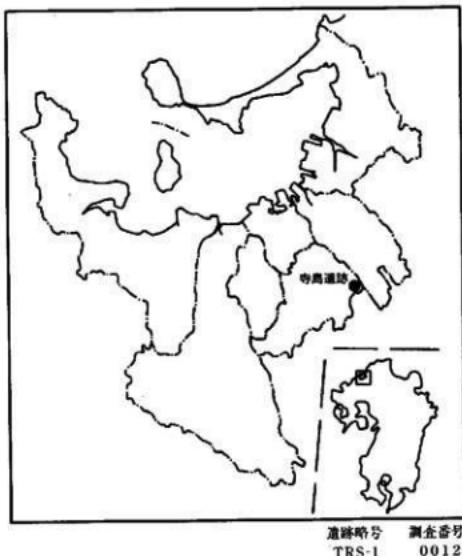
2003

福岡市教育委員会

外環状道路関係文化財発掘調査報告書19

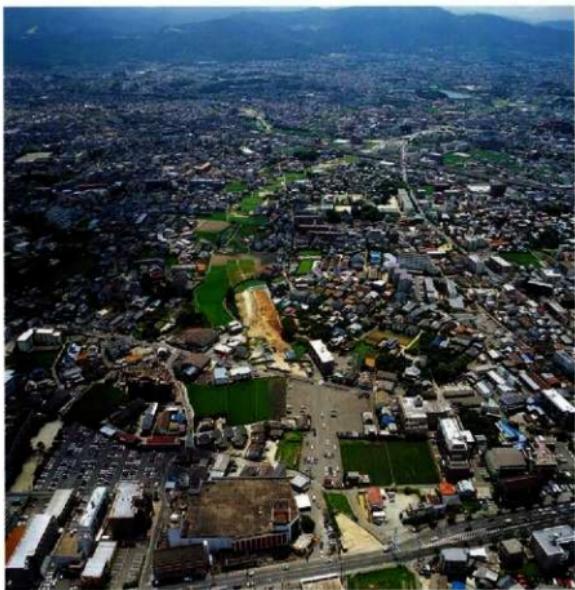
寺 島 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第753集

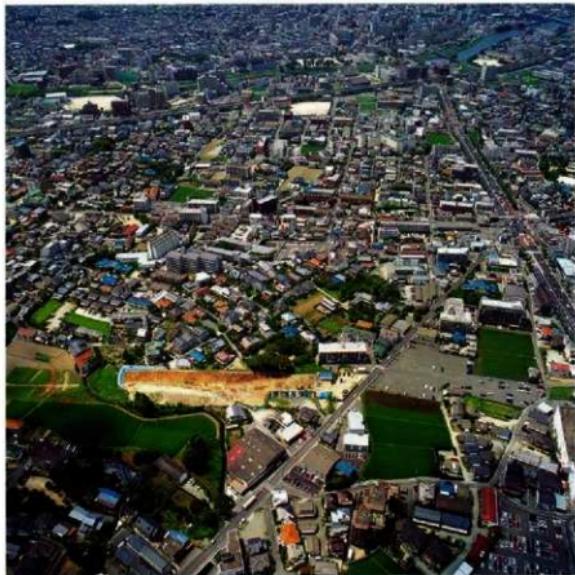


2003

福岡市教育委員会



(1) 調査区遠景（東から）



(2) 調査区遠景（南から）



調査区全景 モザイク（真上から）

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。近年、開発の増加が著しく、それらが次第に失われつつあります。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は福岡外環状道路建設に伴い実施された寺島遺跡調査の記録を報告するものです。調査では、弥生時代から古墳時代を中心とした遺構と遺物が発見されました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで国土交通省福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに対し厚くお礼申し上げます。

平成15年3月14日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例 言

- 1 本書は福岡市教育委員会が南区横手南町地内における外環状道路建設に伴い、発掘調査を実施した寺島遺跡第1次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

次数	調査番号	遺跡略号	遺跡調査原因	所在地	調査面積	調査期間
1次	0012	TRS-1	外環状道路建設	南区横手南町8・21・22	3.850m ²	20000515～1020

- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野忠美、名取さつき、栗木和子、高橋茂子、辻節子、三谷朗子、山田ヤス子が行った。
- 4 本書に掲載した遺物実測図の作成は下原幸裕、濱石正子、撫養久美子、大丸陽子、吉留秀敏、星野が行った。
- 5 本書に掲載した遺構・遺物写真的撮影は星野が行った。
- 6 本書に掲載した挿図の製図は林由紀子、早野が行った。
- 7 本書で用いた方位は磁北で、真北より 6° 21' 西偏する。
- 8 遺構の呼称は竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、その他をSXと略号化した。
- 9 遺構・遺物番号は通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
- 10 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 11 本書の執筆は 9) 旧石器時代の出土遺物については吉留が、それ以外を星野が行った。
- 12 本書の編集は早野が行った。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	10
1) 整穴住居 (SC)	10
2) 据立柱建物 (SB)	22
3) 井戸 (SE)	23
4) 槽 (SD)	29
5) 土坑 (SK)	30
6) 道路状遺構	40
7) ピット出土遺物	44
8) その他の出土遺物	45
9) 旧石器時代の出土遺物	47
IV. まとめ	48

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図	周辺遺跡地形分布図 (1/50,000)	4
第3図	寺島遺跡位置図 (1/5,000)	5
第4図	調査区位置図 (1/500)	6
第5図	調査区概略図 (1/1,000)	7
第6図	調査区十層図 (1/60・1/80)	8
第7図	主要造構配置図 (1/600)	9
第8図	SC01実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)	10
第9図	SC02・03実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (6は2/3、9は1/3、他は1/4)	11
第10図	SC10実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)	12
第11図	SC13実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)	14
第12図	SC15実測図 (1/60) および出土遺物実測図① (1/4)	15
第13図	SC15出土遺物実測図② (27は1/2、他は1/3)	16
第14図	SC24実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)	17
第15図	SC28実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (38は1/2、他は1/4)	18
第16図	SC63実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (41は1/6、他は1/4)	19
第17図	SC101実測図 (1/60)	20
第18図	SC101・102実測図 (1/60)	21
第19図	SB79実測図 (1/60、土層図は1/40)	22
第20図	SE07実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (48は1/3、他は1/4)	23
第21図	SE08実測図 (1/40)	24
第22図	SE08出土遺物実測図 (64は2/3、他は1/4)	25
第23図	SE64実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (71は1/3、72・73は1/6、74は1/8、他は1/4)	27
第24図	SE64出土遺物実測図② (1/3)	28
第25図	SD19土層実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (83は1/3、他は1/4)	29
第26図	SD51出土遺物実測図 (88は2/3、他は1/4)	30
第27図	SK04・05・11・12・16実測図 (1/40)	31
第28図	SK17・18・21・23実測図 (SK17は1/30、他は1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	32
第29図	SK49実測図 (1/100) および出土遺物実測図 (91~94は1/4、他は1/3)	34
第30図	SK59実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (101~107は1/4、108~110は1/3、他は1/2)	36
第31図	SK58・61・65~68実測図 (65は1/30、他は1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	37
第32図	SK69~71・74・77実測図 (1/40)	38
第33図	SK80・81実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	40
第34図	SX27波板状造構実測図①(1/60)	41
第35図	SX27波板状造構実測図②(1/60)	42

第36図	SX27波板状遺構実測図③ (1/60) およびピット十層図 (1/40).....	43
第37図	SP出土遺物実測図 (115~122は1/4、123~125は1/2、126は1/3、他は2/3).....	44
第38図	その他の出土遺物実測図 (133~142は1/4、他は2/3)	46
第39図	旧石器時代の出土遺物 (2/3)	47

図版目次

卷頭図版1	(1)調査区遠景 (東から)	(2)調査区遠景 (南から)
卷頭図版2	調査区全景 モザイク (真上から)	
図版1	(1)調査区遠景 (西から)	(2)調査区全景 (西から)
図版2	(1) I 区全景 (真上から)	(2) II 区全景 (真上から)
図版3	(1)調査区中央土壙断面 (西から)	(2) III 区段落ち状況 (北西から)
図版4	(1)SC01 (北から)	(2)SC02 (北東から) (3)SC03 (南東から)
図版5	(1)SC10 (北から)	(2)SC13 (北から) (3)SC13壁溝小ピット検出状況 (西から)
図版6	(1)SC15 (東から)	(2)SC15出入口土坑遺物出土状況 (北から) (3)SC15遺物出土状況 (真上から)
図版7	(1)SC24 (北から)	(2)SC24出入口土坑遺物出土状況 (北から) (3)SC28 (北から)
図版8	(1)SC63 (北から)	(2)SC63床面遺物出土状況 (西から) (3)SC63床面遺物出土状況 (東から)
図版9	(1)SC01・15・24・101 (真上から)	(2)SC78 (北から) (3)SB79 (北から)
図版10	(1)SE07・08 (真上から)	(2)SE07 (南から)
図版11	(1)SE08 (北西から)	(2)SE08南側土層断面 (東から) (4)SE08遺物出土状況 (南西から)
図版12	(3)SE08北側土層断面 (東から)	(2)SE64 (西から) (4)SD51(北から)
図版13	(1)SE64 (東から)	(6)SD19②土層断面 (南東から)
	(3)SD19 (北から)	(2)SK04 (南東から)
	(5)SD19①十層断面 (南東から)	(4)SK17 (西から) (6)SK17底面小ピット完掘状況 (南から)
図版14	(1)SK16 (北から)	(2)SK18上層 (東から)
	(3)SK17 (西から)	(4)SK23 (西から)
	(5)SK17遺物出土状況 (西から)	(6)SK58 (南東から)
図版15	(1)SK18 (南から)	(2)SK61 (北西から)
	(3)SK21 (西から)	(4)SK65遺物出土状況 (西から)
	(5)SK49 (北から)	(6)SK67 (南から)
図版16	(1)SK59 (西から)	(2)SK69 (西から)
	(3)SK65 (東から)	(4)SK74 (西から)
	(5)SK66 (北から)	(6)SP587遺物出土状況 (真上から)
図版17	(1)SK68 (北から)	(2)SK77 (北から)
	(3)SK70 (北から)	
	(5)SP503遺物出土状況 (真上から)	
	(1)SK71 (西から)	
	(3)SK77土層断面 (北から)	

- 図版18 (1)SX27（真上から） (2)SX27波板状遺構（西から）
(3)SX27波板状遺構（真上から） (4)SX27（西から）
(5)SX27波板状遺構（西から）
- 図版19 出土遺物 I
- 図版20 出土遺物 II
- 図版21 出土遺物 III
- 図版22 出土遺物 IV

付 図 目 次

寺島遺跡第1次調査遺構全体図（1/200）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡外環状道路は昭和44年に都市計画決定された都市計画道路、井尻柏屋線・井尻姪浜線である。平成元年、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所より福岡市教育委員会に福岡外環状道路建設予定地内福重・月隈間16.2kmに関して文化財事前審査申請書が提出された。これを受け、埋蔵文化財課では第Ⅰ工区の立花寺から第Ⅳ工区の野芥・福重間の試掘可能な箇所について隨時試掘調査を行った。その結果、試掘調査で埋蔵文化財が確認された地点について協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

今回報告を行うのは第Ⅰ工区において発掘調査を行った南区横手南町地内の寺島遺跡である。平成11年10月5日に試掘調査を行い、埋蔵文化財が確認されたため、福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社と協議を行った。その結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成12年5月15日から同年10月20日まで発掘調査を行った。

2. 調査の組織

調査委託：国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所

福岡北九州高速道路公社

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課第1係長 山口讓治（前任）力武卓治（現任）

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦（前任）川村浩旭（現任）

事前審査：同課事前審査係長 田中壽夫（前任）池崎讓二（現任）

同係文化財主事 灑本正志（前任）大塚紀宣（現任）

調査担当：同課調査第1係文化財主事 星野恵美

調査補助：名取さつき

調査作業：浅井伸一 池田省三 一宮義幸 伊藤ミドリ 牛尾與志輔 梅野眞澄 甲斐正耕
海津宏子 川岡涼子 川嶋ツキエ 倉光政彦 栗木和子 高橋茂子 让節子 筒井唯義
中園輝文 中園登美子 土生ヨシ子 細川友喜 松本順子 三谷朗子 満田雅子
三好道子 山田ヤス子 吉田一寛 吉田恭子 吉田米男

整理作業：柴田加津子 千々和幸子 萩本恵子 馬場イツ子 橋口勝子 橋口三恵子 日名子節子
松田弘子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社をはじめとして多数の関係者、地元の皆様には多人なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

福岡平野は、東を三郡山地、南から西を背振山系によって開まれ、北は玄海灘に面し、ほぼ南北に拡がる丘陵と沖積平野によって形成されている。沖積平野には那珂川、御笠川が博多湾へと貢流し、その周囲には開拓の進んだ丘陵や段丘が残されている。これらの段丘には弥生時代から中世にかけて拠点的な性格をもつ遺跡が点在している。南から須玖遺跡群、弥永原遺跡、南八幡遺跡群、井尻B遺跡群、諸岡遺跡群、五十川遺跡群、板付遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群などが所在し、その北には発達した砂丘に博多遺跡群、吉塚遺跡群、箱崎遺跡が位置する。現在、都市基盤整備、宅地化が進み、緩やかな傾斜は残るもののはば平坦な地形となり、遺跡が存続していた時期の環境を伺うことは難しくなっている。また、三郡山地より派生した大城山（標高410m）の山麓から北西方向に月隈丘陵、背振山系に属する油山（標高597m）から北側に発達する丘陵には古墳群が展開している。

今回報告する寺島遺跡は背振山地北東部の牛頭山（標高448m）から派生した須玖丘陵の先端に所在し、須玖遺跡群と井尻B遺跡群の中間に位置する。丘陵の東側には御笠川から派生した諸岡川、西側には那珂川が北流する。また、五十川付近で、那珂川から分岐した白水川が寺島遺跡の西側を流れ、遺跡の縁端を沿うように南側を流れる。白水川を挟んで西側には笠抜遺跡、南側には御陵遺跡が位置し、寺島遺跡とは白水川で隔されている。調査区は寺島遺跡の南端の中位段丘上に位置し、標高14.5～16mを測る。

寺島遺跡の周辺を概観すると、南西側には奴国の大墓とされる須玖岡本遺跡を中心とした弥生時代中期～後期の須玖遺跡群が拡がる。青銅器・ガラス製品・鉄器の生産に関連した大量の遺物が出土している。南側の御陵遺跡でも銅鏡鋳型が出土し、ここには古墳時代前期とされる全長約30mの前方後円墳が位置している。調査区の西側の笠抜遺跡でも銅鐸土製品、銅矛片、青銅器の鋳造関連遺物が出土している。他にも突帯文期の水路、弥生時代中期末から後期にかけての井堰を伴う貯水構造、古墳時代前期、律令期の遺構が確認されている。その隣の日佐遺跡群では細石刃文化期・绳文時代後期・突帯文期の包含層、古代末から中世にかけての集落が確認されている。北側の井尻B遺跡では、細石刃文化期の包含層、弥生時代前期から古墳時代の集落、前方後円墳、古代の井尻魔守等が検出されている。ここでも青銅器・ガラス製品等の生産に関連した遺物が出土する。さらに北に抜けると、環濠集落・水田遺跡として著名な板付遺跡が所在し、前期末の豪富墓からは細型銅劍・銅矛が出土している。その西側にはナイフ型石器が出土した諸岡遺跡群がある。板付遺跡の北には水田遺跡である那珂君体遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群が位置する。那珂遺跡では突帯文期の環濠集落が確認され、弥生時代の青銅器生産を示す銅戈・銅劍の鋳型が出土している。古墳時代前期には福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれる。比恵遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡で、ここでも青銅器の生産が確認されている。また、古墳時代後期には大型の掘立柱建物群や横列が見つかっており、「那津官家」との関連が想定されている。

このように寺島遺跡が所在する那珂川と御笠川に挟まれた段丘地帯は、福岡平野でも有数の遺跡が点在する地域である。今回の調査地点は遺跡の南端に位置し、遺跡の中心は北側に延びていくと考えられる。



1. 寺島遺跡 2. 穂佐遺跡 3. 朝日遺跡 4. 南玖遺跡群 5. 佐永原遺跡群 6. 日佐遺跡群 7. 和田B遺跡群 8. 尾多日遺跡群
9. 鮎崎遺跡群 10. 斎八幡遺跡群 11. 安野遺跡群 12. 和田遺跡群 13. 三筑遺跡群 14. 佐藤遺跡群 15. 諸岡B遺跡群
16. 井尻B遺跡群 17. 五十川遺跡群 18. 那珂遺跡群 19. 比良遺跡群 20. 高倉遺跡 21. 緑付遺跡 22. 水河曾体遺跡
23. 東那珂遺跡群 24. 宝原遺跡 25. 稲田遺跡群 26. 吉母遺跡群 27. 駒込遺跡 28. 伊多遺跡群 29. 古峰本町遺跡
30. 離越遺跡 31. 黑田大曾遺跡群 32. 宝満尾遺跡 33. 上月腰遺跡群 34. 金鋼遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



地形分類凡例

山 地

- 大高地山地 (海拔高400m以上)
- 中高地山地 (海拔高200m以上 400m未満)
- 小高地山地 (海拔高200m未満)
- 山地帶 (高差度100m以下)
- △ 島嶼地 (島嶼地20m以下)
- 沿海地 (沿岸地20m以下)
- 低地帶 (低地帶20m以下)
- 低地斜面 (低地斜面20m以下)
- 填地 (填地20m以下)
- 土地整理地 (耕地面積20m以下)
- 土地整理地 (耕地面積20m以上)
- 土地整理地 (耕地面積10m以上)
- 土地整理地 (耕地面積10m未満)
- 土地整理地 (耕地面積10m以上)
- 土地整理地 (耕地面積10m未満)

丘 陵

- 大起伏丘陵 (起伏度100m~200m)
- 小起伏丘陵 (起伏度10m未満)
- 低地帶台地 I (高差度20m以下)
- 低地帶台地 II (中高差度)
- 低地帶台地 III-1 (低差度丘)
- 低地帶台地 III-2 (低差度丘)
- 邊坡 (參照)
- 土石潰陷丘

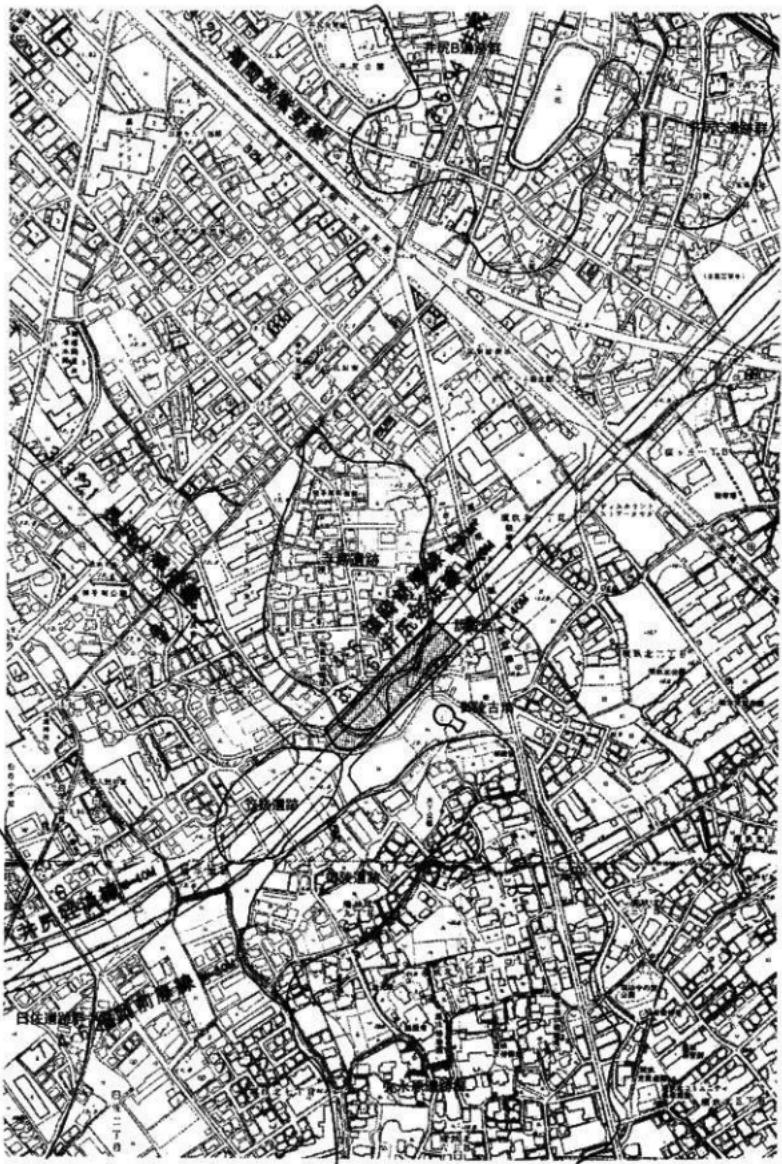
台 地

低 地

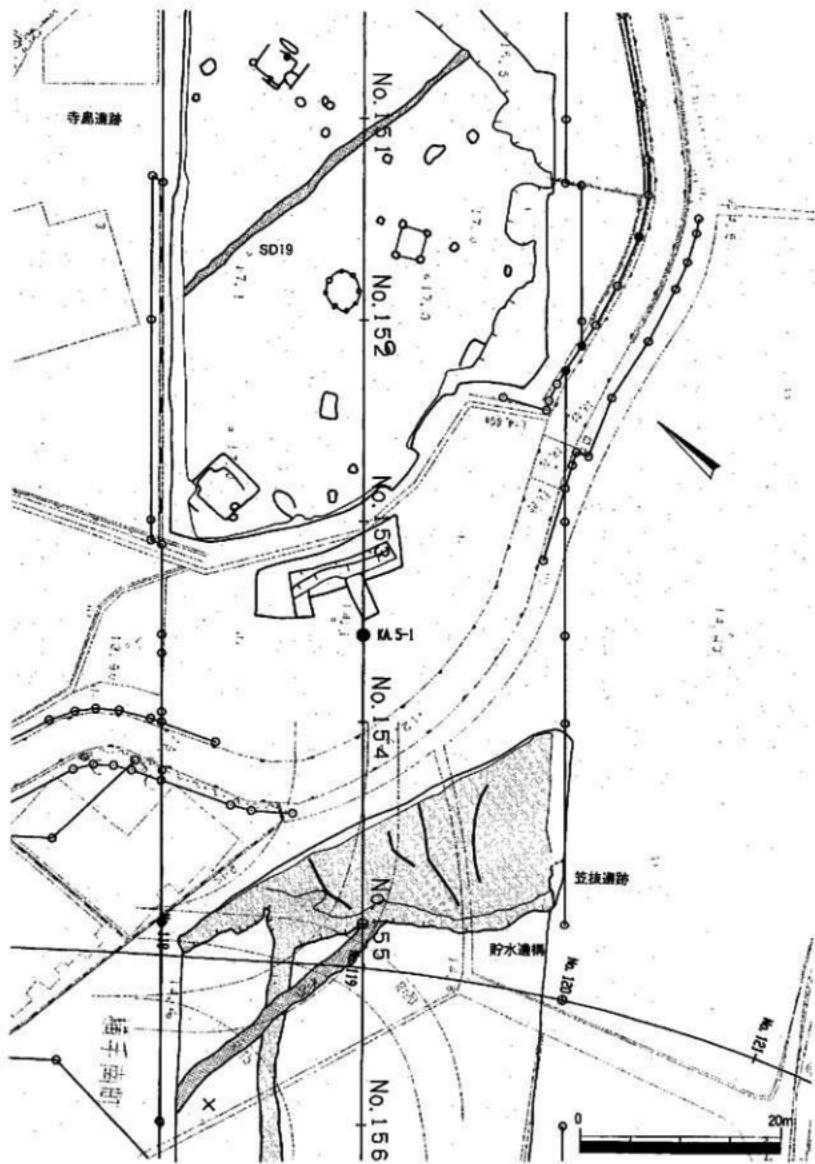
- 沖積平原
- 三角洲平原
- 河川河床
- 河川河漫
- 河川河床平原 (高差度2°~6°)
- 上游河漫平原
- 中游河漫平原
- 下游河漫平原
- 河川河床
- 河川河漫
- 河川河床
- 河川河漫

福岡市土地分類調査「地形分類図」

第2図 周辺地形分布図 (1/50,000)



第3図 寺島遺跡位置図 (1/5,000)



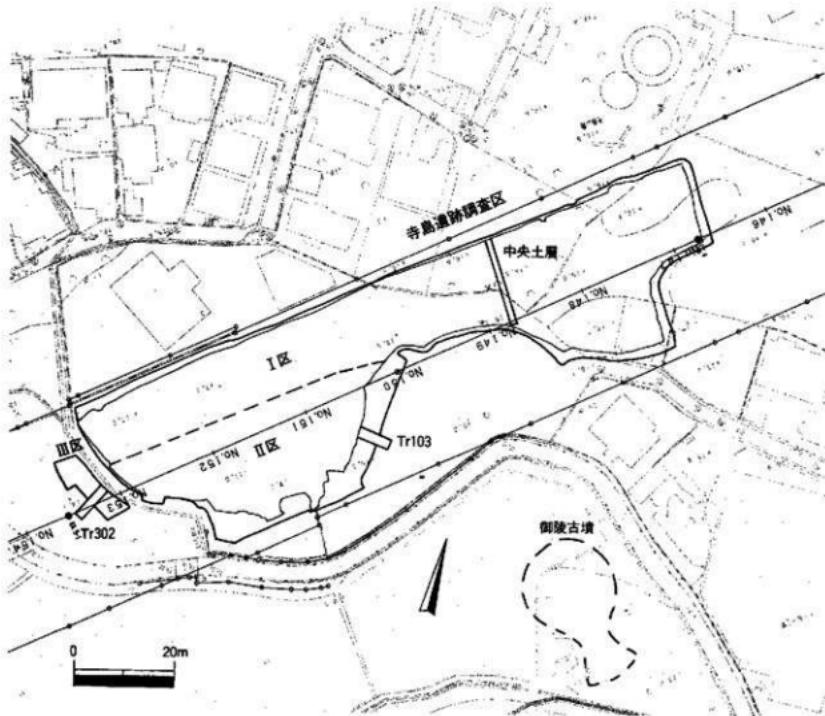
第4図 調査区位置図 (1/500)

III. 調査の記録

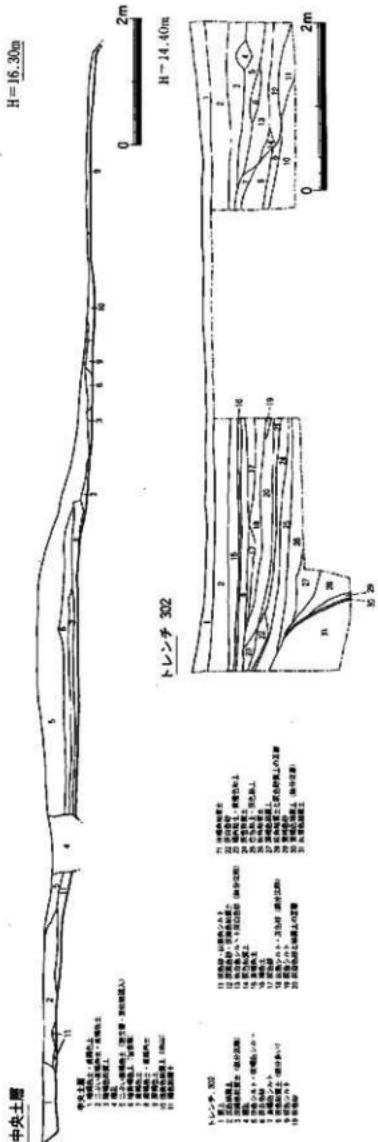
1. 調査の概要

調査区は寺島遺跡の南端に位置し、調査前の標高は15.5~17mを測る。現況は宅地であり、1m近く盛土されていた。盛土を除去する段階で、2m四方の搅乱坑が見られ、ブロック塀等の産業廃棄物が投棄されていた。この搅乱坑は遺構面まで達しており、多くの遺構を削平していた。

調査は廃土処理の関係もあり、I区・II区・III区（第5図）に分けて行った。調査区は台地の縁辺に位置し、南側から西側にかけては、白水川が流れる。そのため遺構面の標高はI区北東側が最も高く16mを測り、I区・II区の南東側は白水川に向かって急激に落ちる（付図・第7図）。遺構は大きく削平されており、特にI区の東側はほとんど検出されず、白色を呈した八女粘土が露出する。宅地以前の水田に作る用水路が多く見られ、この段階には削平されていたと考えられる。また、I区の南東側にもトレンチを入れ、遺構の確認を行った。深さ10cm程のピットを検出したが、遺物も含まれておらず、覆土もぶい灰褐色を呈していた。大半の東側の遺構は削平されていると考えられる。I区の台地上の基本層序は中央上層（第6図）では上から盛土、旧表土、遺物・炭化物を含んだぶい黄



第5図 調査区概略図 (1/1,000)

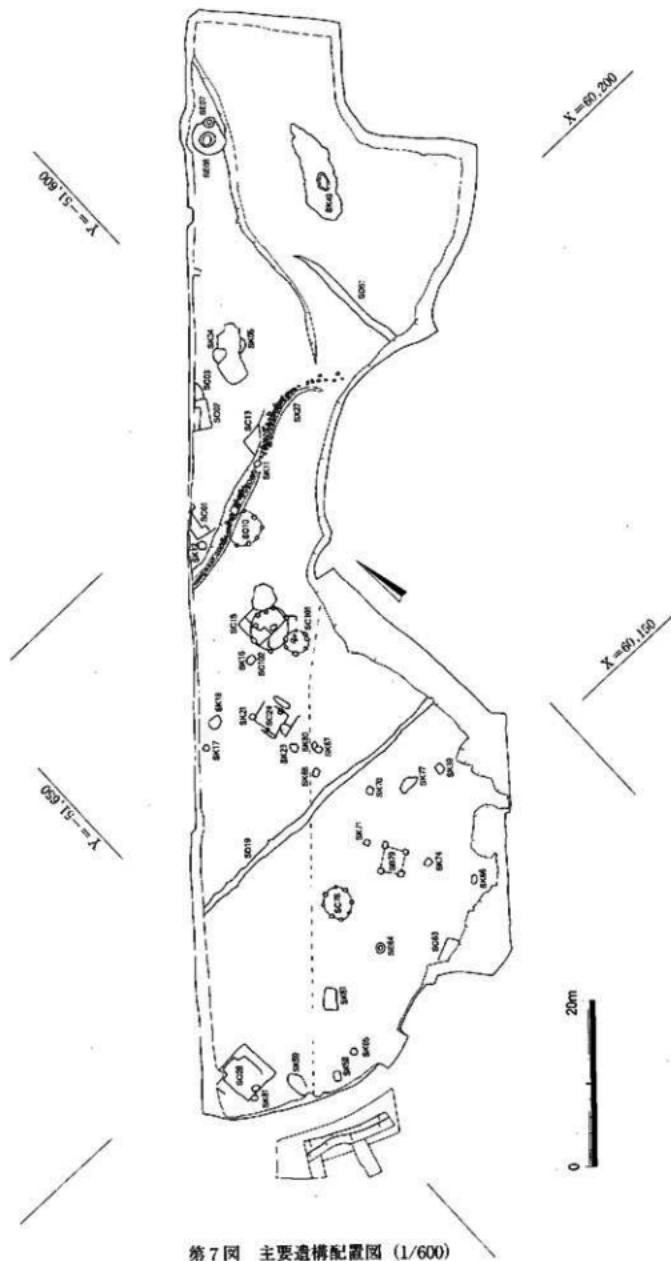


第6図 調査区土層図 (1/60・1/80)

褐色土、暗黃褐色土、褐色土となり、にぶい黄褐色土、浅黄色粘質土の地山に至る。遺構は地山の面で確認できる。次に調査区の南西側であるが、I区からIII区にかけては現況でも2.5m近くの比高差があった。III区はトレンチを入れて、確認を行ったが、表土から1m下までは灰色土、褐色土等の互層で水田耕作にともなうものと考えられる。トレンチ302(第6図)からは北側の壁2~2.5m部分から灰色砂の層となり、急激に白水川に向かって地山が落ちていく状況が伺える。地山は灰黒色粘質土である。この灰黒色粘質土はトレンチ103(第5図)でも1.6m程掘削した段階で検出でき、南東側斜面も同様に落ちている様相が伺える。III区の灰色砂は1m程掘削すると、湧水し、それ以上になると川からの流水のためトレンチの壁の砂層が崩落し、掘削することは出来なかった。砂層からは青磁、白磁、黒色土器、土師器、須恵器(第38図)が出土する。対岸の笠抜遺跡では突堤文期の水路、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての井堀を伴う貯水遺構が見つかっている。

検出した遺構は全て大きく削平され、遺存状況は悪い。主な遺構は弥生時代中期の円形竪穴住居5軒・土坑、弥生時代終末の方形竪穴住居2軒・井戸1基・土坑、古墳時代初頭～前期の方形竪穴住居5軒・井戸2基・土坑、古代の溝1条・土坑、中世の不定形土坑・波板状遺構を検出した。

調査は平成12年5月15日に、重機によるI区の表土剥ぎ作業を開始した。遺構精査、掘削を終え、7月17日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影をおこなった。I区の調査を終え、廃土の反転、II区の表土剥ぎ作業を7月24日から開始した。併せて、III区の遺構確認を行った。9月12日にII区のラジコンヘリコプターによる全景写真撮影を終え、9月27日から埋め戻しを開始し、遺物洗浄・器材撤収を終え、平成12年10月20日に調査を完了した。



第7図 主要造構配置図(1/600)

2. 遺構と遺物

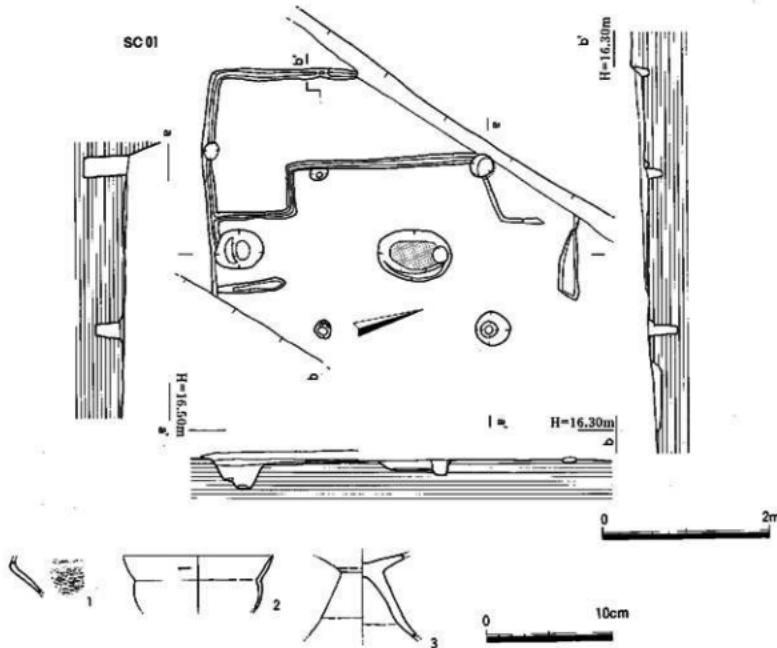
1) 壴穴住居

SC01 (第8図、図版4)

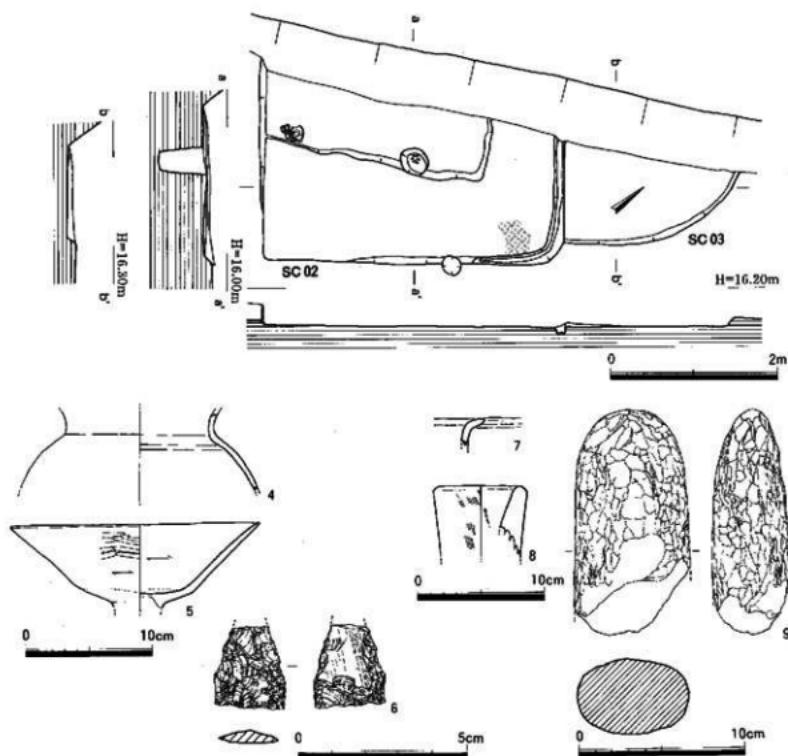
調査区のほぼ中央に位置する方形プランの斐穴住居である。北西側は調査区外に延び、東側は削平される。遺存状況は悪く、東西現存長3.5m、南北4.4mを測り、平面プランは正方形をなすと思われる。残存壁高は最も遺存している部分でも10cmである。西側にはベット状遺構が「コ」の字状に巡る。ベット状遺構の幅は約90cmを測り、高さは4~6cm程しか残っていない。地山を削りだして作っている。ベット状遺構の周囲には幅約12cm、深さ5cm程の周溝が巡る。南側壁面中央には、径が45~58cm、深さ30cmを測る円形の小土坑があり、出入り土坑と考えられる。この出入り土坑の東側にも西側と同じ周溝が巡る。このことから東側にも西側と同じベット状遺構の存在が想定される。床面中央には径60~90cm、深さ10cmの楕円形を呈した小土坑が検出され、中からは多量の焼土、炭化物が出上した。この小土坑を囲むように4本の主柱穴を確認した。主柱穴の規模、深さにはばらつきがある。出土遺物から古墳時代初頭と位置づけられよう。

出土遺物 (第8図)

1~3は土師器である。1は甕の頸部片で、外面には叩きが残る。外面に叩きを施した後、頸部付近は横ナデをおこなう。内面は磨滅し、調整不明である。白色微砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。2



第8図 SC01実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)

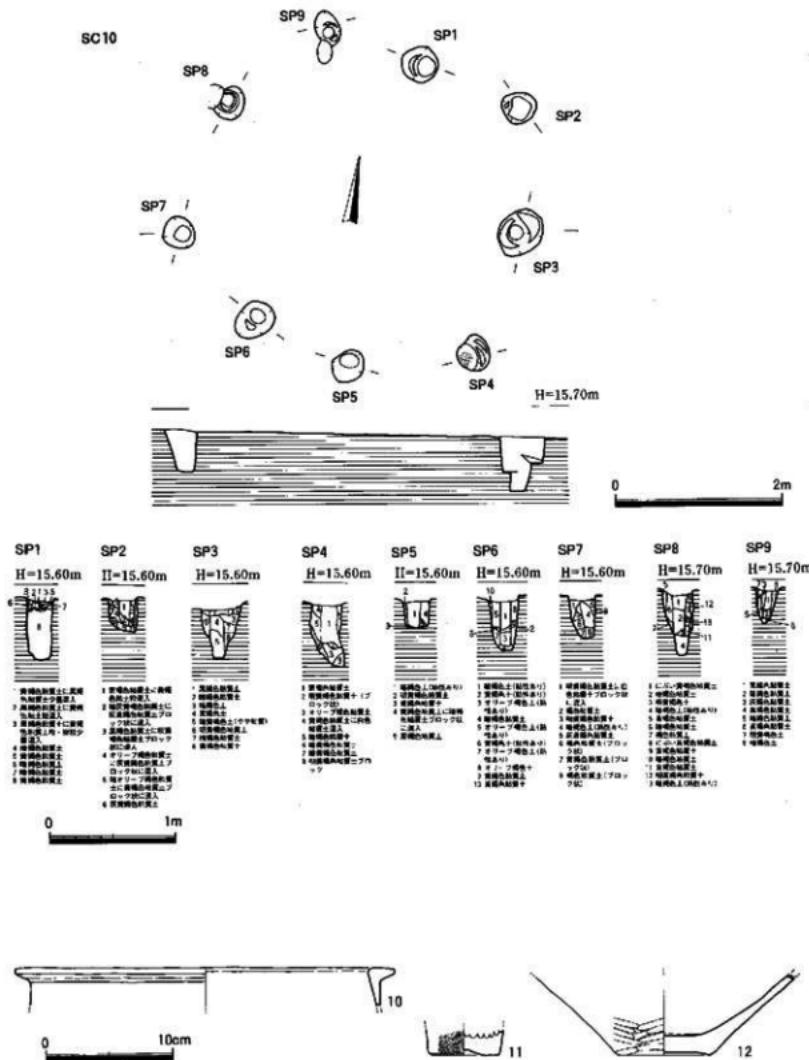


第9図 SC02・03実測図(1/60)および出土遺物実測図(6は2/3、9は1/3、他は1/4)

は小型丸底壺の口縁部で口径11.8cmを測る。偏球状の胴部に口縁部がやや内湾気味に外にひらく。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。磨滅が著しく、研磨は残っていない。頸部外面には縦方向の刷毛目が残る。3は高杯の脚部片である。磨滅が著しく、調整不良である。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒、灰色砂粒を多量に含み、外面は淡黄色、内面は灰色を呈する。他に細粒砂岩製の石包丁片、黒曜石片6点が出土する。

SC02 (第9図、図版4)

調査区の中央、SC01の東側に位置する方形プランの堅穴住居である。北西隅は調査区外へ延び、南端は削平されている。SC01同様造存状況は極めて悪く、東西3.6m、現存長南北2.1m、残存壁高は最も良好な北西端で30cmを測る。北東から南東にかけてベット状造構が巡り、プランは北東側で80cm、南側で15mとやや不定形である。その外側では幅10~20cm、深さ4cmを測る周溝を検出した。ベット状造構の東側コーナー部分には焼土がまとまって出土する。主柱穴はベット状造構を切っている径30cm、深さ50cmのピットである。上層では直径25cmの柱痕を確認した。西側床面からは土師器の高杯が出土する。出土遺物から古墳時代前期と位置づけられよう。



第10図 SC10実測図（1/60・1/40）および出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第9図、図版19）

4・5は土師器である。4は壺の頸部片で、口縁部は外反する。磨滅が著しいため、調整不明である。金雲母、白色砂粒、灰色砂粒を多量に含み、外面は淡黄褐色、内面は淡黄色を呈する。5は高坏の坏部で、脚部は欠損する。口縁部はわずかに外反する。外面には刷毛目調整を行ったのち、研磨を施した部分が一部残るが、大半は磨滅している。底部を除いて、内外面ともに明橙色を呈した化粧土が施される。胎土は金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。6は平基式無茎石錠である。黒曜石製で黒色を呈する。基部上部にわずかな突起が付く。主要剥離面は研磨調整されている。表面左側基部には一部自然面が残る。先端は欠損し、現存で長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを測る。重さは2.18gである。SC03等からの混入の可能性が考えられる。他に土師器壺の破片、弥生土器の小破片も出土した。

SC03（第9図、図版4）

調査区の中央に位置し、西側の大半をSC02に切られ、北西側は調査区外へ延びている。一部の検出であるが、円形の豊穴住居になると思われる。残存壁高は約10cmを測る。主柱穴等は検出していない。出土遺物は弥生土器の小片ばかりであるが、周辺の状況から住居の時期は中期と思われる。

出土遺物（第9図）

7・8は弥生土器である。7は小壺の口縁部小片である。調整は不明で、胎土には金雲母、白色砂粒を含む。色調は黄褐色を呈し、部分的に明褐色が残る。8は器台の上部片である。外面は磨滅しているが、内面にはしづら痕が残る。胎土には粒子の粗い白色砂粒を大量に含む。色調は明褐色を呈する。9は玄武岩製の石斧で、刃部を欠損する。整形は敲打、一部剥離により行われる。現存長13.4cm、幅6.3cm、厚さ4.5cmを測る。重さは665.01g + aである。

SC10（第10図、図版5）

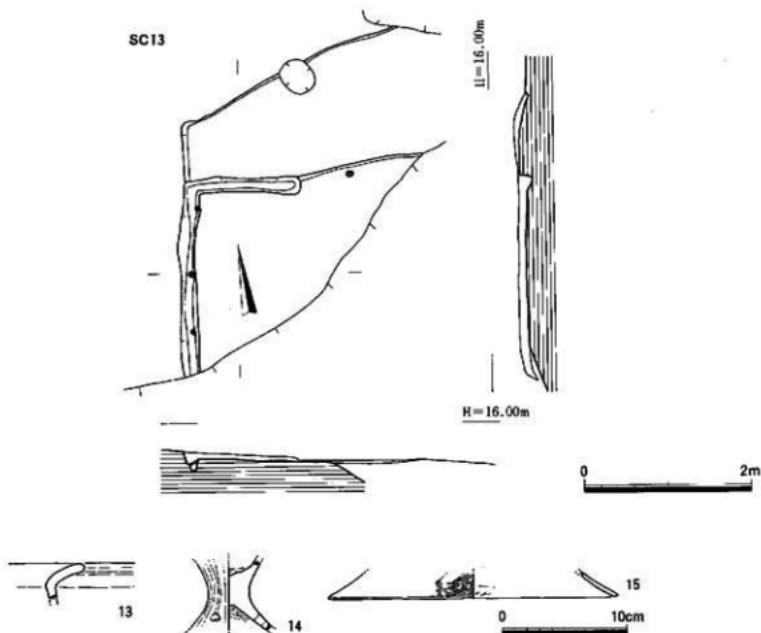
調査区の中央、SC01の南側に位置する円形プランの豊穴住居である。柱穴のみ検出した。住居は南側の方が大きく削平されているため、柱穴も北側の方が遺存状況が良好である。柱は直径4mの円を描くように9本配される。柱穴の径は30~55cm、深さ33~80cmを測る。柱穴間の距離は80cm~1.2mである。SP4からは黒褐色粘質土を呈した柱痕を検出面で確認した。土層からは他の柱穴からも柱の痕跡が見える。出土遺物から弥生時代中期と推定される。

出土遺物（第10図）

10~12は弥生土器である。10は壺の口縁部片である。逆「L」字状を呈し、復元口徑30cmを測る。磨滅が著しいが、頸部外面には横ナデの痕跡が残る。胎土には金雲母、角閃石、白色砂粒を含む。色調は淡橙褐色を呈する。11は壺の底部片で、底径5.6cmを測る。ナデで調整を行う。胎土に金雲母、白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。12は壺の底部片で、底径7.2cmを測る。外面は磨滅が著しいが、一部に研磨が残る。内面はナデで調整する。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含む。外面は橙褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。他に黒曜石片1点が出土した。

SC13（第11図、図版5）

調査区の中央、SC02の南側に位置する方形プランの豊穴住居である。SC10同様、北側から南側にかけて削平され、北西コーナー部分が遺存している。北側の一部と西側には周溝が巡る。周溝は幅20cm、深さ約10cmを測る。また、西側周溝内には70cmの間隔で小ビットを検出した。残存壁高も良好な部分で10cmを測る。北側部分は約5cm程高くなっている。検出状況では不定形を呈するが、ベット状遺構の可能性もある。弥生土器から土師器、須恵器まで出土するが、平面プラン、方向から古墳時代初頭と考えられる。



第11図 SC13実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）

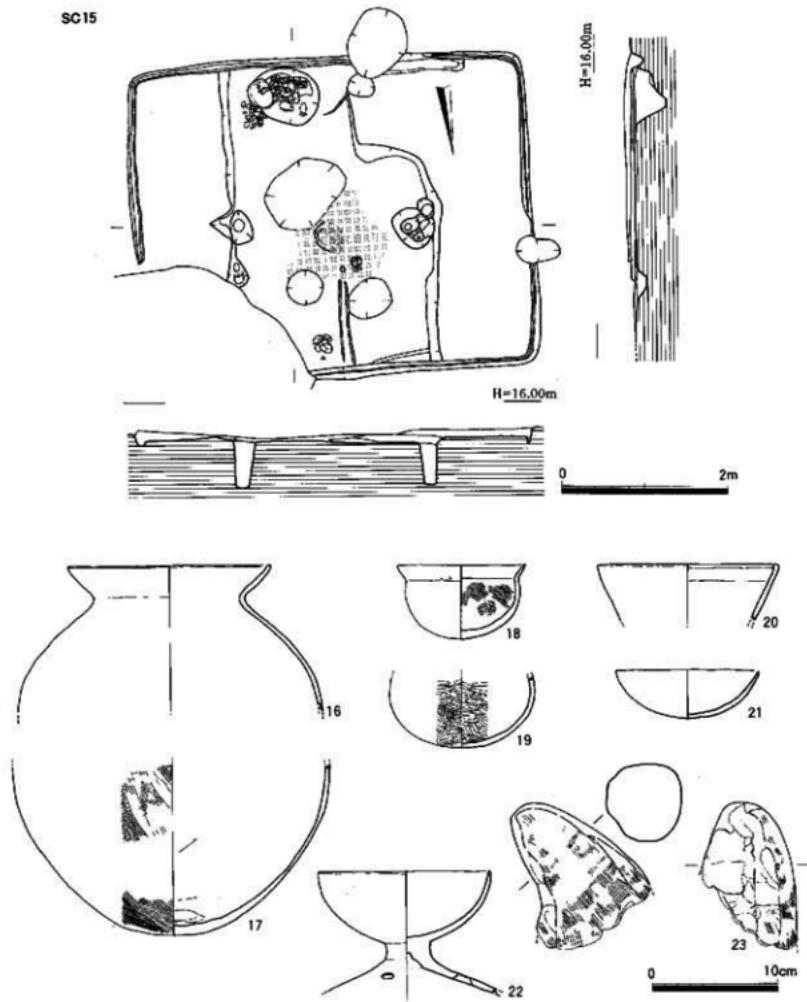
出土遺物（第11図）

13～15は土師器である。13は壺の口縁部片で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめている。外面はナデで調整する。赤褐色粒、白色砂粒を多量に含み、淡橙色を呈する。14は高壺の脚部で、中位に円形透かしをもつ。2ヶ所の遺存であるが、復元すると3ヶ所に存在するとと思われる。外面と壺部内面には一部研磨、脚部内面にはしばり痕が残る。金雲母、白色砂粒を少量含み、内外面ともに明澄色を呈する。15は器台の脚部片である。内外面ともに刷毛目を施した後、研磨調整する。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。他に須恵器小片1点、黒曜石片2点が出土する。

SC15（第12図、図版6）

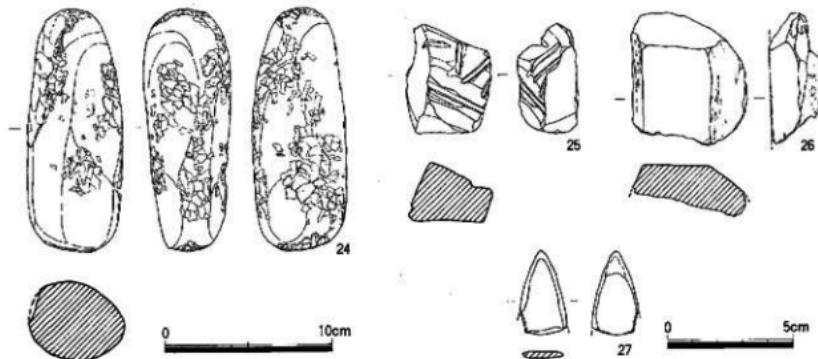
調査区中央に位置し、SC10の西側に位置する方形プランの竪穴住居である。北東コーナー部は削平されている。全体のプランは確認でき、東西現存長4.7m、南北3.8mを測り、長方形をなす。残存壁高は最も遺存している部分でも15cmである。ベット状造構は東側、西側にあり、西側は南側へ鉤手状に巡る。ベット状造構の幅は約1mを測るが、高さは5～10cm程度である。地山を削りだして作っている。住居の壁に沿って幅約10cm、深さ5cm程度の周溝が巡る。南側壁面中央に円形の小土坑があり、径が70～90cm、深さ35cmを測る。出入口上坑と考えられる。出入口土坑には石、土師器（第12図-16・18・21）がまとめて廃棄されていた。床面中央には後世のピットに一部削られているが、直径1mの範囲で炭化物、焼土が散乱していた。焼土は炭化物の中央部分にまとまって検出された。これを挟む

SC15



第12図 SC15実測図(1/60)および出土遺物実測図①(1/4)

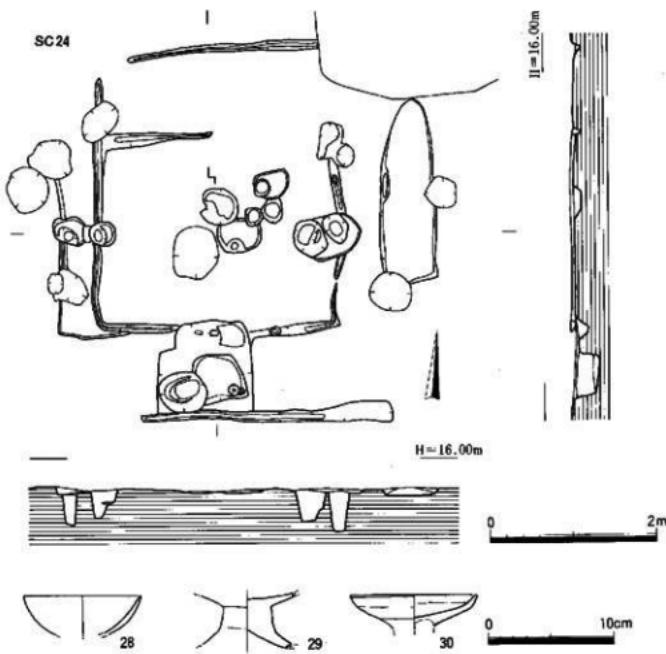
ように2本の主柱穴を確認した。主柱穴は切り合っている。また、西側ベット部分の北側と南側の壁部分で周溝の切り合いが確認されたことからも、この住居は立て替えが行われたと考えられる。出土遺物は弥生土器、黒曜石片等の遺物も多く出土したが、床面直上からはまとまって古墳時代初頭に位置する土師器が出土した。土師器は布留式土器でもやや古層の様相を呈している。住居の時期は古墳時代初頭と位置づけられよう。



第13図 SC15出土遺物実測図② (27は1/2、他は1/3)

出土遺物 (第12・13図、図版19)

16~22は土師器である。16は壺の口縁部片で、復元口径16.2cmを測る。口縁は外傾し、端部内側をつまみ上げている。器壁の磨滅が著しく、調整は不明である。胎土に白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。17は壺の底部片である。外面は刷毛目、内面底部は指ナデ、肩部はケズリで調整する。胎土に少量の金雲母、大量の白色砂粒を含み、色調は外面淡橙色、一部黒色、内面灰色を呈する。18・19は小壺丸底壺である。18はほぼ完形で、口径10.2cm、器高6cmを測る。偏球状の体部に、内湾気味に口縁が短く立ち上がる。外面は刷毛目調整後、研磨を施しているが、単位は不明である。内面は肩部に刷毛目調整が残るが、口縁部・底部はナデ消している。胎土には角閃石、金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。19は口縁部を欠損する。刷毛目調整を行った後、丁寧に研磨している。底部外面付近には一部刷毛目調整が残る。胎土は金雲母、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。外面底部付近は黒色を呈する。20は壺の口縁部片で、復元口径14.4cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、丁寧端部内面には段を有する。21は鉢で、口縁部が一部欠損するがほぼ完形である。口径11.4cm、器高3.9cmを測る。内外面ともに丁寧なナデで調整する。胎土には角閃石、金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。22は高杯で、脚部が欠損する。杯部は楕円状を呈し、口径13.6cmを測る。脚部は大きく開き、中位には3ヶ所の円形透かしをもつ。内外面ともに丁寧なナデで調整される。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含む。全体は橙色であるが、一部明橙色を呈する。23は上製の支脚で、下部は欠損する。円錐状の頭部を内傾させている。形状が粗く外面は刷毛目調整を行った後、指ナデ、指押さえで調整する。角閃石、金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多量に含み、黄橙色を呈する。住居両側の床面から出土する。24~27は石器である。24は叩き石である。側面を一部欠損する。上下端、側面を敲打している。長さ14.5cm、幅5.5cm、厚さ4.7cmを測る。重さは564.47gである。25は砂岩製の砥石である。不定形な形で、3面に溝を有する。溝の幅は3~4mmと幅広である。26は細粒砂岩製の砥石である。砥面は3面遺存するが、大半は欠損する。砥面には一部擦痕がみられる。27は砂岩製の磨製石鎌である。基部は欠損し、磨滅を受けている。現存で長さ3.35cm、幅1.9cm、厚さ3mmを測る。重さは2.7g+αである。混入と考えられる。他に不明鉄製品1点、弥生土器小片、黒曜石片38点が出土する。



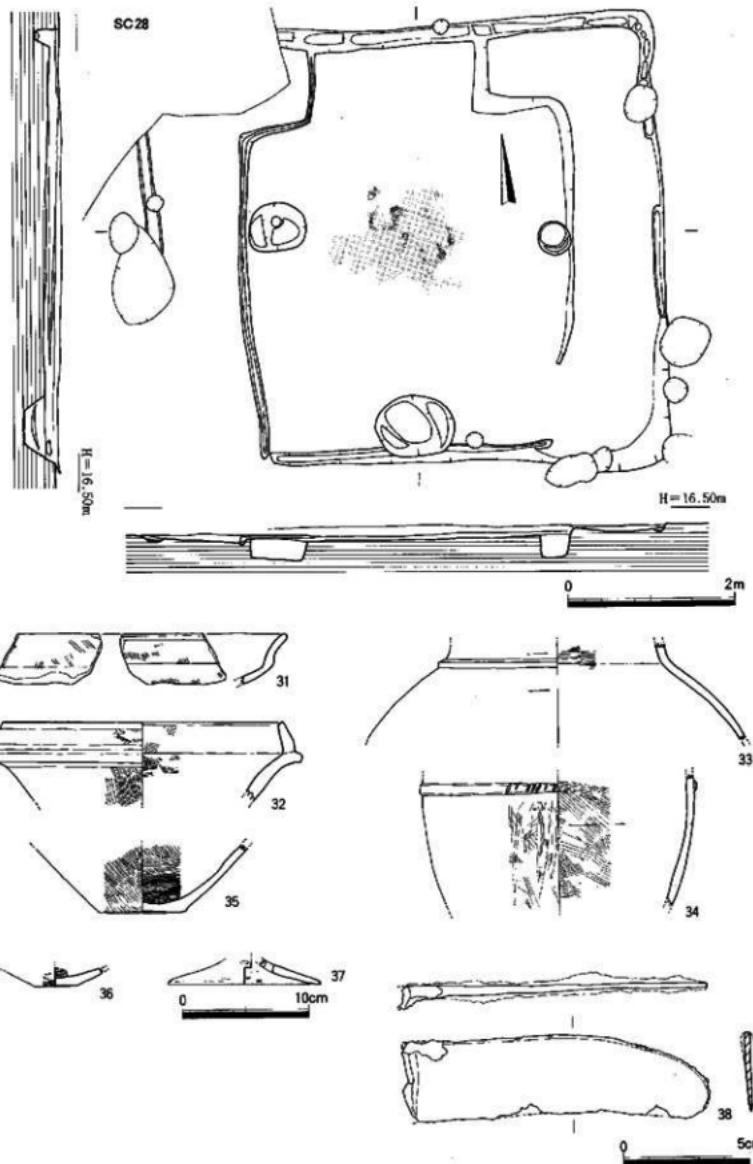
第14図 SC24実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)

SC24 (第14図、図版7)

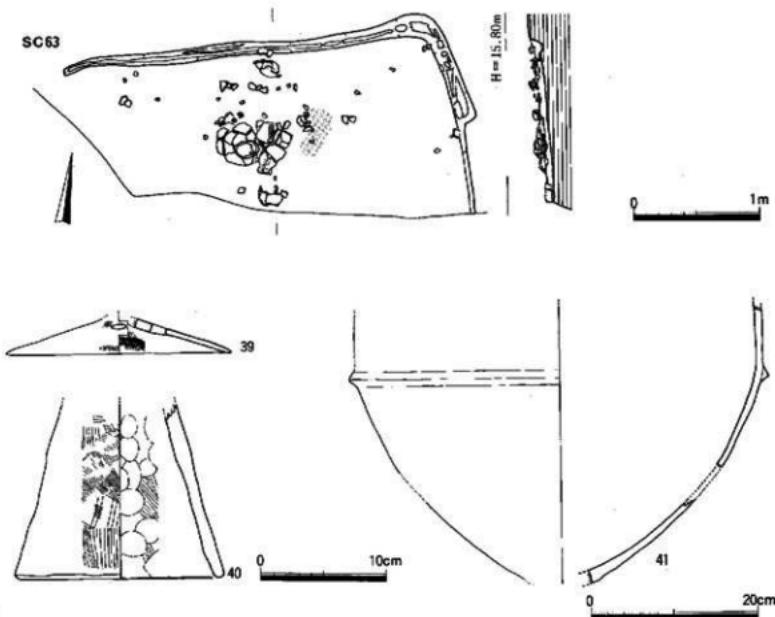
調査区西側、SC15の西側に位置する方形プランの竪穴住居である。遺存状況は悪く、周溝と主柱穴、出入口土坑のみが遺存している。南北方向は周溝、出入口の土坑が遺存し、約4.5mを測る。また東西方向も周溝からプランを復元すると、4.5mの方形をなすと考えられる。周溝の深さは7cm程度である。北側のベット状造構は幅90cm、高さ5cmを測る。西側は狭く、幅40cm、高さ4cmを測る。SC15同様、主柱穴、出入口の土坑は3回の切り合があり、立て替えが想定できる。床面には焼土、炭化物等は確認できなかった。出入口土坑からは土師器（第14図-28・29・30）が出土する。出土遺物から竪穴住居の時期は古墳時代初頭と推定される。

出土遺物 (第14図、図版19)

28~30は土師器で、出入口土坑からの出土である。28は鉢の口縁部片である。小型で器壁は薄く、復元口径9.2cmを測る。器面は磨滅し、調整不明である。胎上に金雲母、白色砂粒を含み、外面は橙色、内面は黄橙色を呈する。29は高杯の脚部片で、脚部は低く、大きく裾部が開くものと思われる。磨滅が著しく、調整不明である。金雲母、白色砂粒を少量含み、橙色、一部明橙色を呈する。30は器台の受部で、受部径10cmを測る。口縁は短く外傾し、端部は丸くおさめる。受部と脚部の接合部には放射状の調整痕が残る。磨滅が著しく、調整不明である。金雲母、白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。他に弥生土器小片、黒曜石片2点が出土する。



第15図 SC28実測図（1/60）および出土遺物実測図（38は1/2、他は1/4）



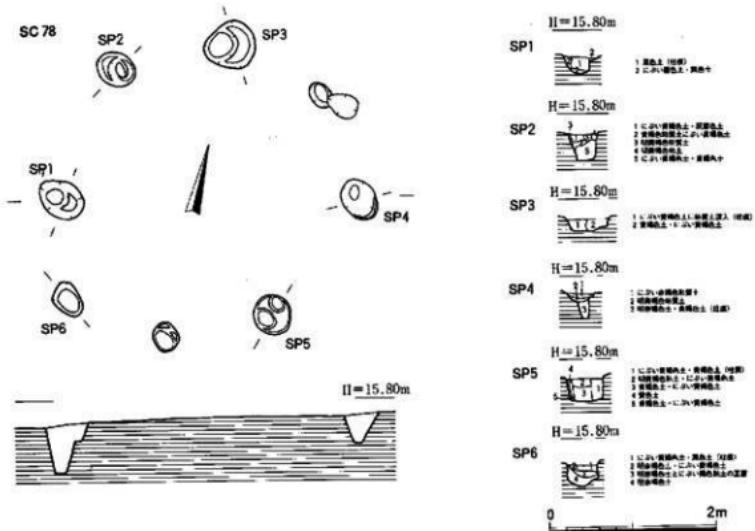
第16図 SC63実測図 (1/40) および出土物実測図 (41は1/6、他は1/4)

SC28 (第15図、図版7)

調査区の西側に位置する方形プランの竪穴住居である。住居の西側は削平を受けている。東西6.2m、南北5.2mを測り、長方形をなす。残存壁高は北側で12cmを測る。東西にベット状造構があり、ともに北側壁に鉤手状にまわる。ベット状造構は北側で幅0.8m、東側、西側で幅1mを測る。東側から北側に続くベット状造構は高さ7cm程遺存する。西側から北側にかけてのベット状造構は周溝によって確認でき、部分的に2cm程しか残っていない。周溝は東側で一部途切れるもののほか全周する。床面中央には焼土に混じって、多量の炭化物が出土した。中央土坑は検出できなかった。主柱穴はベッド状造構の中央部分に2本検出した。深さは約28cmを測る。出入口土坑は南側壁中央部分で検出した。径70~90cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。遺物は弥生上器から上師器まで出土するが、床面出土の土器の状況から住居の時期は弥生時代終末~古墳時代初頭と推定される。

出土遺物 (第15図、図版19)

31~36は弥生土器である。31は高環の口縁部片で、内傾気味に立ち上がり、端部にかけて外反する。内外面ともに刷毛目で調整した後、横ナデを施す。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。32は複合口縁部の口縁部片で、口径22.3cmを測る。内外面ともに刷毛目で調整した後、横ナデを施す。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。33は壺の頸部片で、頸部に一条の三角突帯を巡らす。外面は研磨調整と思われるが、大半が磨滅している。内面には一部横方向の刷毛目が残る。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。34は腹部片で、1条の刻目突帯を巡らす。内外面ともに、刷毛目調整を行った後、部分的にナデ消している。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。35は壺の底部片で、内外面ともに刷毛目調整をおこなう。36は小型壺の底



第17図 SC101実測図 (1/60)

部片で、平底を呈する。外面は刷毛目その後、研磨を施し、内面は刷毛目調整が残る。金雲母、白色砂粒をわずかに含み、外面は橙色、内面は灰黒色を呈する。37は土師器の高杯脚部片である。脚部中位に円形の透かしが一部残る。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。38は鉄製鋸で、全長12.2cm、背部の厚さは0.2~0.45cmを測る。着装部はわずかに折り返している。これらの遺物は全て床面出土である。他に土師器片、黒曜石片2点が出土する。

SC63 (第16図、図版8)

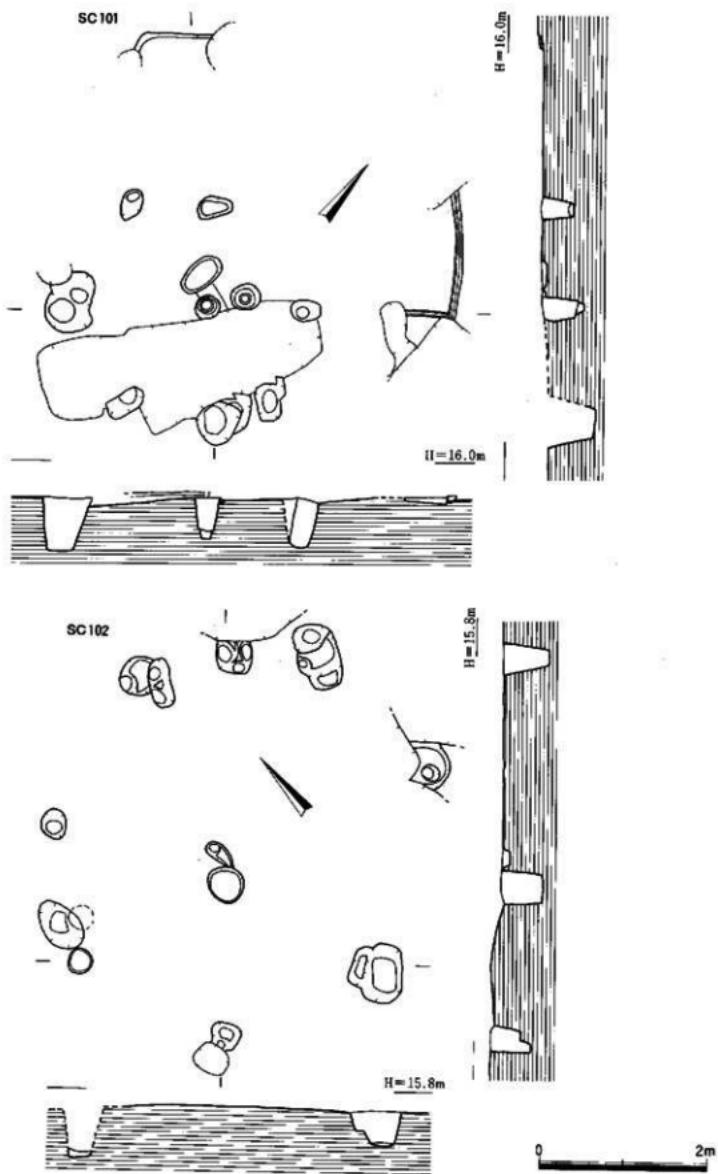
調査区南西端に位置する方形プランの竪穴住居である。西側は調査区外へ延び、南側は大きく削平されている。幅約10cm、深さ約15cmの周溝を検出した。残存壁高は6~10cmを測る。床面には弥生時代終末の漆の底部片が散乱していた。その周辺に炭化物、焼土が出土した。主柱穴は検出できなかった。床面出土の上器の状況から住居の時期は弥生時代終末~古墳時代初頭と推定される。

出土遺物 (第16図)

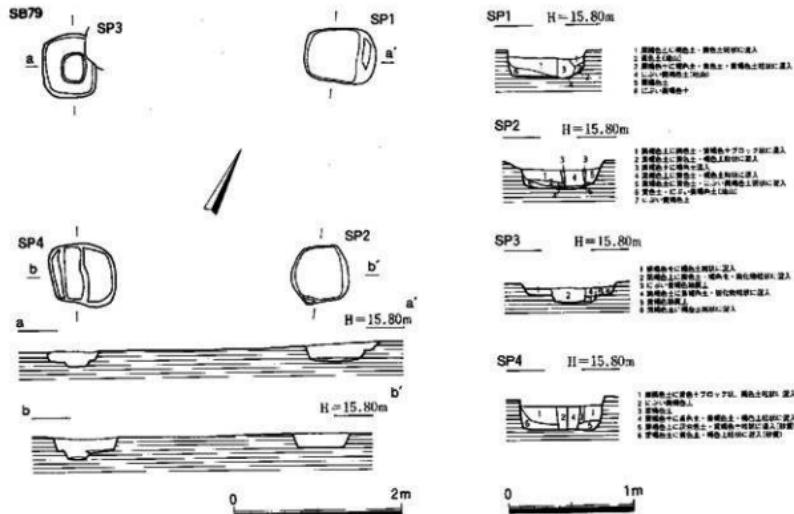
39は土師器の高杯脚部である。脚部中位に4ヶ所の円形透かしをもち、裾部は大きく開く。金雲母、白色微砂粒を少量含み、白橙色を呈する。大部分が磨滅しているが、部分的に刷毛目調整が残る。40は弥生土器の器台の底部片である。内外面ともに刷毛目調整した後、指ナデ、指押さえで調整する。白色砂粒を多量に含み、明赤褐色を呈する。41は弥生土器の大甕の副部片である。最大副部径は66.8cmを測り、下位に1条の三角突帯が巡る。磨滅が著しく、調整は不明である。赤褐色粒、白色砂粒を多量に含み、淡橙色を呈する。遺物は全て床面出土である。他に土師器片、石斧片、黒曜石片3点が出土する。

SC78 (第17図、図版9)

調査区の西側中央部に位置する円形の竪穴住居である。主柱穴のみ検出した。柱は直径3.6mの円を描くように8本配される。柱穴の径は25~60cm、深さ28~56cmを測る。柱穴間の距離は70cm~



第18図 SC101・102実測図 (1/60)



第19図 SB79実測図 (1/60、土層図は1/40)

90cmである。土層からは柱の痕跡が窺えるものもある。遺物は弥生時代中期の土器細片が出土した。住居の時期は床面が遺存せず、土器も少量であるが、弥生時代中期と考えられる。

SC101 (第18図、図版9)

調査区の中央、SC15の南側に位置する円形の堅穴住居である。SC15に切られている。柱穴と周溝の一部を検出した。柱は直径2.8mの円を描くように配される。柱穴の切り合が多いため何度も立て替えを行った可能性がある。柱穴の径は30~60cm、深さ46~62cmを測る。周溝はややいびつであるが、柱穴から1.5~1.8mの範囲で弧を描いている。復元すると、直徑約6m程の円形堅穴住居となる。また北東部分で、周溝が90度西に折れることからこの部分に出入り口が付設された可能性が考えられる。弥生時代中期の甕の口縁部片、弥生土器片が出土している。住居の時期はほぼこの時期と考えられる。

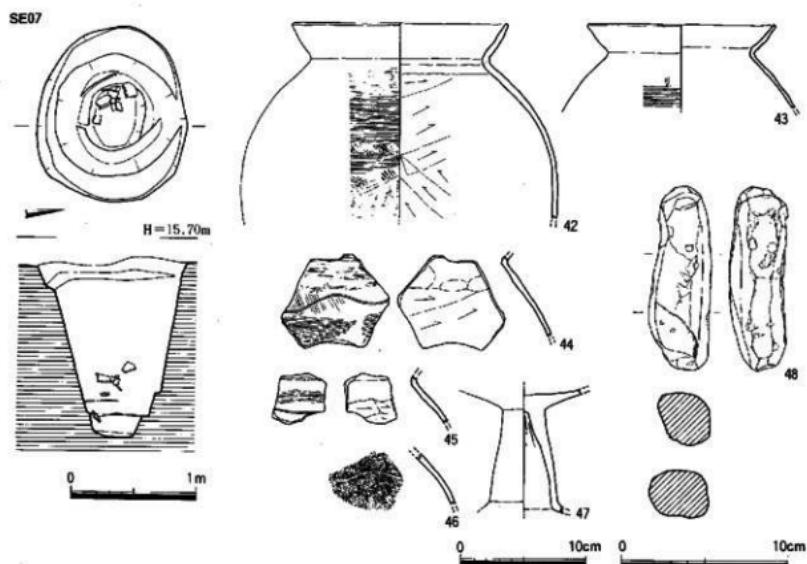
SC102 (第18図)

調査区の中央、SC15に重複する円形の堅穴住居である。主柱穴のみ検出した。柱は直徑4.5mの円を描くように配される。柱穴の径は25~70cm、深さ32~52cmとばらつきがある。柱穴が切り合っているため、同じ場所に何度も立て替えを行った可能性が考えられる。遺物は弥生土器片、黒曜石片が出土する。他の円形堅穴住居と同じ弥生時代中期と考えられる。

2) 掘立柱建物

SB79 (第19図、図版9)

調査区の南側に位置し、1間×1間の建物である。主軸方向をN-26°Wとする。桁行3.0m、梁行2.55mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺65~85cm、深さ18~25cmを測る。土層からは黒褐色土に褐色土・黄色土が粒状に混入した柱穴痕が確認された。全ての柱穴からは弥生土器の小破片が出土する。SP-2の掘方からは赤色顔料の付着した平底の細片が出土する。



第20図 SE07実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (48は1/3、他は1/4)

3) 井戸

SE07 (第20図、図版10)

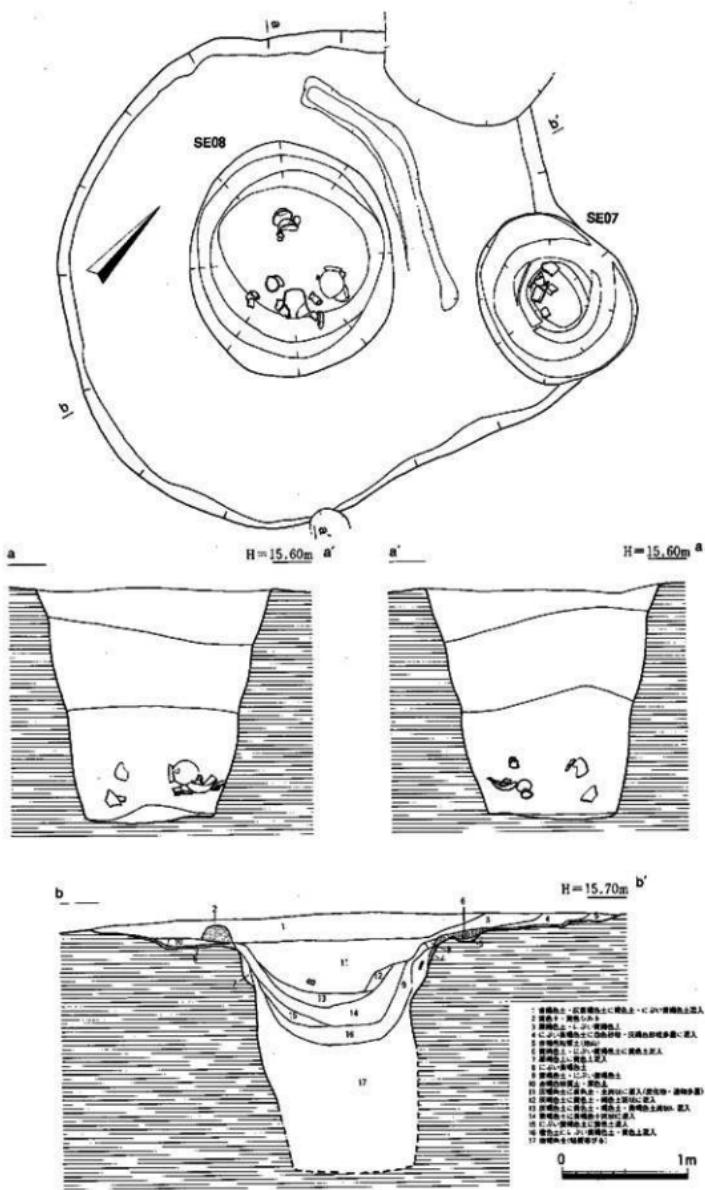
調査区の東側に位置する。井戸掘方の平面プランは径1.2~1.4mを測り、東西に長い梢円形を呈する。深さは1.43mを測る。素掘りの井戸で、掘削は八女粘土の下層、灰黒色砂にわずかに至る。鳥栖ロームと八女粘土の境で湧水し、段掘り状となる。出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。

出土遺物 (第20図)

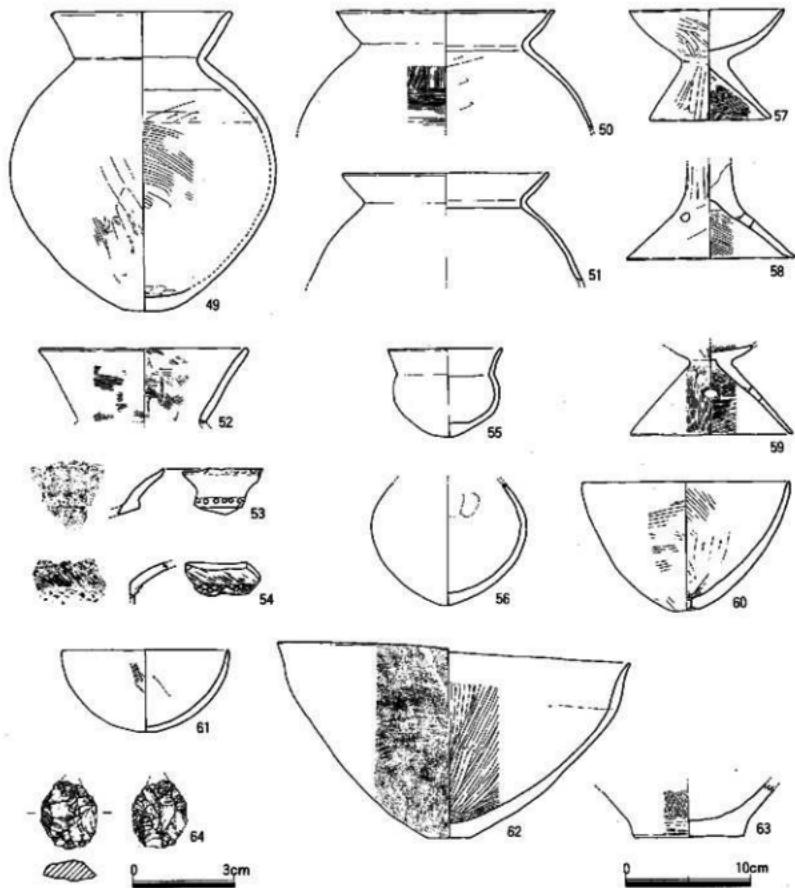
42~47は土師器である。42~46は壺で、42は復元口徑17.2cm、43は15cmを測り、口縁は内傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面は一部叩き痕が残るが、刷毛目調整で仕上げる。42の内面はケズリの調整が残るが、43は磨滅のため不明である。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。44~46は肩部片で、肩部には波状の沈線を1条巡らす。外面は刷毛目調整し、沈線部付近のみナデ消している。内面はケズリで調整する。いずれも胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。47は高環の脚部片である。外面には縱方向の研磨がわずかに残る。脚部内面上半にはしばり痕が残り、下半はナデ消している。赤褐色粒、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。48は叩き石である。自然石をそのまま使用し、端部と一部側面を敲打している。長さ10.9cm、幅3.6cm、厚さ3.1cmを測る。重さは205.73gである。他に上師器の鉢の小片が出土する。

SE08 (第21図、図版10・11)

調査区の東側、SE07の西側に位置する。井戸掘方の平面プランは径1.6~1.9mを測り、東西にやや長い梢円形を呈する。深さは1.85mを測る。素掘りの井戸で、掘削は八女粘土の下層、灰黒色砂まで



第21図 SE08実測図 (1/40)



第22図 SE08出土遺物実測図 (64は2/3、他は1/4)

至っている。鳥柄ロームと八女粘土の境で湧水する。下層からは完形に近い遺物（第22図-49・52・57・60・62）が出土する。この井戸の掘方から0.8~1.2mの間隔で井戸を取り囲む3~10cmの段落ちがある。十層はこの段落ちがSE08に伴うことを示している。また、上層からは幅25cm、高さ15cmの台形状の高まり（第21図-2層）が確認できる。これは東西方向の十層でも同じ規模で確認できる。北側では6層が崩れて流れているが、2層とほぼ同じ土である。復元すると井戸の周りには直径1.7mのドーナツ状に幅25cm、高さ15cmの高まりを人為的に築いている。弥生土器、黒曜石片も多く出土するが、井戸の時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

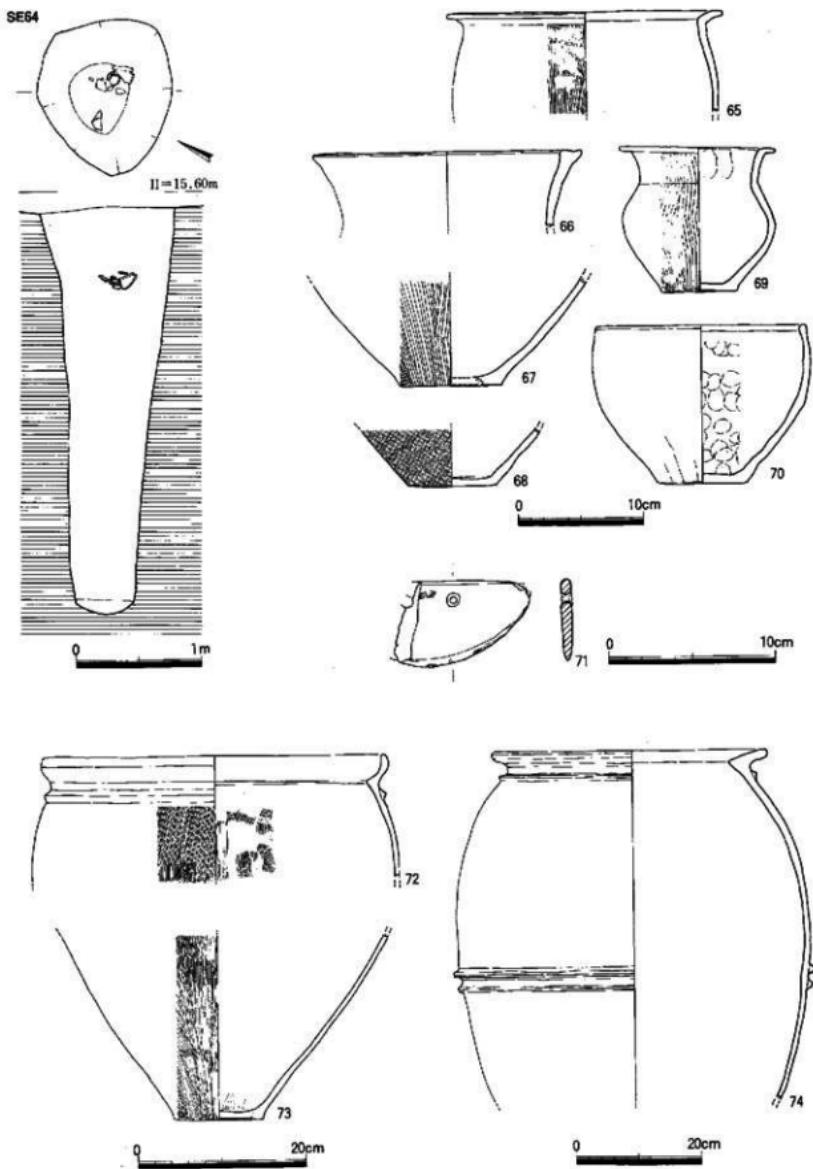
出土遺物 (第22図、図版20)

49~62は土器類である。49~51は壺である。49は完形品で、球胴形の体部に頸部が狭くしまり、口

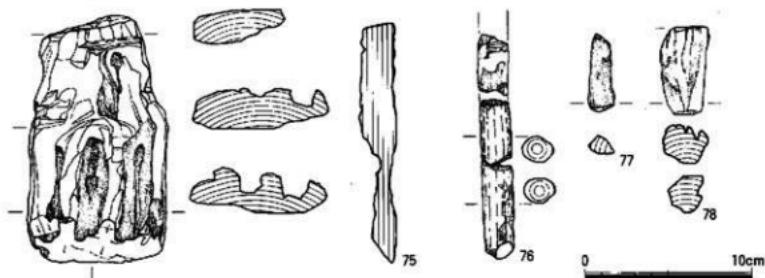
縁部が長く立ち上がる。端部は丸くおさめている。器壁は厚く、底部はわずかに平底状を呈する。外面下半には斜方向の刷毛目が残るが、他は丁寧にナデ消している。内面底部は指押さえ、下半には斜方向の刷毛目、上半はヘラケズリで調整する。金雲母、白色砂粒を多量に含む。内外面ともにぼい黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。50・51はなで肩の体部から口縁部が内傾気味に立ち上がり、端部内側に段を有する。51は器壁が磨滅している。50の外面は肩部が縱方向、下半が斜方向の後、横方向の刷毛目で調整する。内面はヘラケズリで仕上げる。金雲母、赤褐色粒を含み、50は橙色、口縁部内面には煤が付着する。51は淡橙色を呈する。52は広口壺の口縁部で、復元口径16.1cmを測る。調整は外面頸部付近は縱方向、外面は横方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛日の後、横方向の刷毛目である。内外面ともに刷毛目調整の後は横方向のナデで仕上げる。金雲母、白色砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。53は二重口縁壺の口縁部片である。口縁は屈曲した後、外傾気味に延び、端部でわずかに内傾する。端部外面は面取りを行った後、竹管文を施す。屈曲部にも竹管文が施される。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。54は屈曲部に刷毛目状工具で斜方向に押し当て、格子目状の文様を刻んでいる。外面は斜方向の刷毛日の後、横ナデで調整する。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、明赤褐色を呈する。55・56は小型丸底壺である。55は復元口径9cm、器高7cmを測る。偏球状の体部に口縁が外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめている。器壁は厚く、外面は刷毛目調整が残るが、内外面ともにナデで仕上げている。56は胴部片で、底部はやや尖底状を呈する。外面は磨滅し、調整不明であるが、内面には一部指ナデ痕が残る。ともに金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、55は橙色、56は淡橙色を呈し、外面は一部黒色である。57・58は高壺である。57は底部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。口径12.2cm、器高8.8cm、脚部径9.5cmを測る。壺外部上面は斜方向、接合部から脚部にかけては縱方向の研磨調整を行う。壺内部は部分的に刷毛目が残るが、研磨で仕上げる。脚部内面は斜方向の刷毛目調整を行う。金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。脚部外面には煤が付着する。また、脚端部付近には、整形した後、粘土で補修した痕跡が見られる。58は脚部片で、底径13.4cmを測る。中位に3ヶ所、円形透かしをもつ。外面には一部縱方向の研磨痕が見られる。内面には斜方向の刷毛目調整をおこなう。金雲母、白色砂粒をわずかに含み、淡橙色を呈し、一部には化粧土を施したと思われる明橙色が残る。59は小型器台の脚部片である。脚部径13cmを測り、中位に2ヶ所、円形の透かしをもつ。脚部外面には縱方向、内面には横方向の刷毛目、受部内面には放射状に刷毛目調整を行う。外面は縱方向の研磨調整である。赤褐色粒を多く含み、明橙色を呈する。60~62は鉢である。60は底部に径6mmの円形の穿孔をもつ。口径16.4cm、器高10.3cmを測る。外面は横方向の刷毛目、内面上半は斜方向の刷毛目、下半はケズリで調整している。赤褐色粒、白色砂粒を多量に含み、橙色を呈する。61はほぼ完形品で、丸底を呈する。口径13.3cm、器高6.5cmを測る。調整は一部刷毛目が残るが、丁寧に研磨している。金雲母、白色砂粒をわずかに含み、明褐色を呈する。62は小さな平底から開き気味に立ち上がり、口縁部付近で内傾して端部は外反する。外面は叩きの後、下半は縱方向の刷毛目、上半は横方向の刷毛目、内面は縱方向の丁寧なナデで調整している。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。63は弥生土器の底部片である。平底を呈し、壁面は磨滅している。金雲母、白色砂粒を多く含み、明褐色を呈する。64は黒曜石製の突起型石礫である。先端部は欠損する。全面細かい剥離で調整している。現存で長さ2cm、幅1.65cm、厚さ0.6cmを測る。重さは1.76gである。他にも弥生時代終末の壺の胴部片、庄内壺の胴部小片等が出土する。

SE64 (第23図、図版12)

調査区の西側に位置する。井戸掘方の平面プランは径1.05~1.25mを測り、東西にやや長い楕円形を呈する。深さは3.25mを測る。素掘りの井戸で、壁はほぼ直線状にすばまっている。遺物は標高



第23図 SE64実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (71は1/3、72・73は1/6、74は1/8、他は1/4)

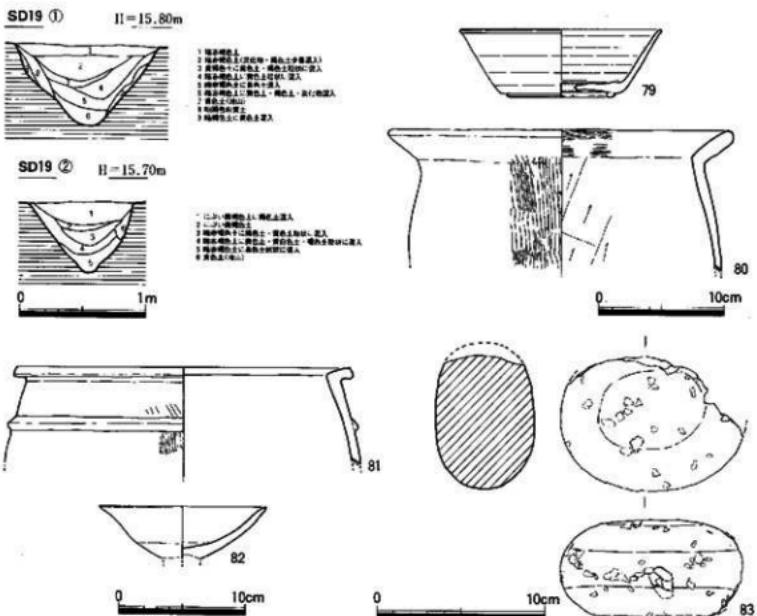


第24図 SE64出土遺物実測図② (1/3)

15m付近から弥生土器（第23図-70・72）、最下層から木製品、花崗岩の大石、弥生土器（第23図-69・73・74）がまとまって出土した。この井戸は弥生時代終末と位置づけられる。

出土遺物（第23・24図、図版20・21）

65～70、72～74は弥生土器である。65は壺の口縁部片で、復元口径22cmを測る。外面は縱方向の刷毛目、口縁部から内面にかけてはナデで調整する。白色砂粒を含み、にぶい橙色を呈する。外面には煤が付着する。66は広口壺の口縁部片である。口縁は直立気味に立ち上がり、端部は平坦に仕上げる。丁寧な横方向のナデで調整する。金雲母、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。67・68は底部片で、ともに平底を呈する。67は赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。68の胎土は精良で、橙色を呈し、外面には赤褐色の赤色顔料が一部残る。69は小壺で一部欠損する。口径12.5cm、器高11.6cm、底径6cmを測る。全体的に磨滅を受けているが、外面には縱方向の刷毛目、内面口縁部付近には指押さえの痕跡がある。白色微砂粒を多く含み、白橙色を呈する。70は鉢で半分欠損する。復元口径16.8cm、器高12.6cm、底径7cmを測る。平底を呈し、口縁部は内傾し、端部は丸くおさめている。外面、口縁部内面はナデ、胴部内面は指押さえで調整する。金雲母、白色微砂粒を少量含み、明赤褐色を呈する。72～74は大甕である。72は口縁部片で、復元口径41.4cmを測る。口縁部は内済し、端部は丸くおさめる。口縁部直下に1条の三角突帯が巡る。内外面は縱方向の刷毛目、口縁部は横方向のナデで調整する。金雲母、白色砂粒を多く含み、褐色を呈する。73は底部片で、底径10.8cmを測る。外面は縱方向の刷毛目、内面は刷毛目後、ナデで調整する。白色砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。74は口径44.3cm、最大胴部径56cmを測る。口縁は「く」の字状を呈し、直下に三角突帯が1条巡る。最大胴部より下位には、台形状の突帯が2条巡る。全面ナデで調整する。淡橙色、橙色を呈し、外面は一部黒色を呈する。また、外面には煤の付着がみられる。胎土には金雲母、白色砂粒を含む。71は小豆色を呈した揮線凝灰岩製の石包丁である。刃には両刃を作る。よく使用したと思われ、擦痕が多く、刃こぼれしている。孔径は0.8cmを測り、両側から穿孔している。現存長さ8cm、幅5.1cm、背部は6mmを測る。75～78は木器である。75は農具未製品である。割材を使用し、最大長29.3cm、最大厚4.9cm、最大幅16.4cmを測る。内外面に加工痕がみられるが、製品には至っていない。76は棒杭と思われ、芯持で、一部樹皮が残る。残存長は26.2cm、最大径3.1×3.7cmを測る。77は木片と思われる。割材で、残存長10.6cm、最大厚2.2cm、最大幅3.1cmを測る。78は杭と思われる。割材で残存長10.6cm、最大厚4.4cm、最大幅5.4cmを測る。樹種はスギと思われる。これらの木製品は井戸の最下層から出土した。他に弥生土器の高坏脚部片、砂岩製の砥石片、黒曜石片が出土する。



第25図 SD19上層実測図 (1/40) および出土物実測図 (83は1/3、他は1/4)

4) 溝

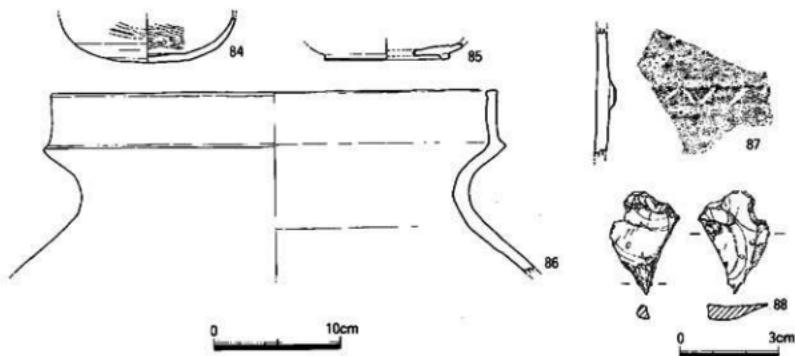
検出された多くの溝の大半は最近の水田に関する用水路と考えられる。

SD19 (付図・第25図、図版12)

調査区の西側に位置し、N-83°Wとほぼ東西方向に走る。全長約37mを検出した。西側は調査区外へ延び、東側は大きく削平されている。検出面は削平を受けているためばらつきがあるが、幅0.5~1.0m、深さ60cmを測る。底面の深さはほとんど変わらない。断面はゆるい「V」字状をなす。覆土は上層が黄褐色土、下層が赤褐色土を呈し、炭化物を含んでいる。水の流れた様相は呈していない。弥生土器、十師器、須恵器片も出土するが、他の遺物から時期は奈良時代と推定される。

出土遺物 (第25図)

79は須恵器の高台付壺である。復元口径16.2cm、底径8.7cm、器高5.4cmを測る。底部はヘラ切り未調整である。胎土は赤褐色粒、白色砂粒を含み、灰色を呈する。80は上師器の壺である。体部はわずかに膨らみ、口縁部は「く」の字状に外反する。復元口径は27.4cmを測り、外面は縱方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面は斜方向の刷毛目で調整する。金雲母、白色砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。81は弥生土器の壺の口縁部片である。口縁部は逆「L」字状を呈し、口縁下部に1条の三角突帯が巡る。内外面ともに磨滅が著しいが、外面には刷毛目調整がみえる。白色砂粒を多量に含み、橙色を呈する。82は高壺の壺部である。口径13.2cmを測り、口縁部はわずかに外反する。



第26図 SD51出土遺物実測図 (88は2/3、他は1/4)

金雲母、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。83は花崗岩の擦り石である。側面は一部敲打している。現存で10.8cm、幅6cm、厚さ5.8cmを測る。重さは201.08gである。他に竈、土師器高台の脚柱部、土師器の高台付碗の小片、黒曜石片が出土する。

SD51 (付図、図版12)

調査区の東側に位置し、ほぼ南北方向に走る。北側は削平され緩く始まっているが、南側は大きく削平されている。南側で幅1.0m、深さ20cmを測る。底面の深さは北側に較べ、南側が20cm程深くなっている。古墳時代前期の遺物が多量に出土するが、土師器、須恵器から時期は奈良時代に位置づけられる。

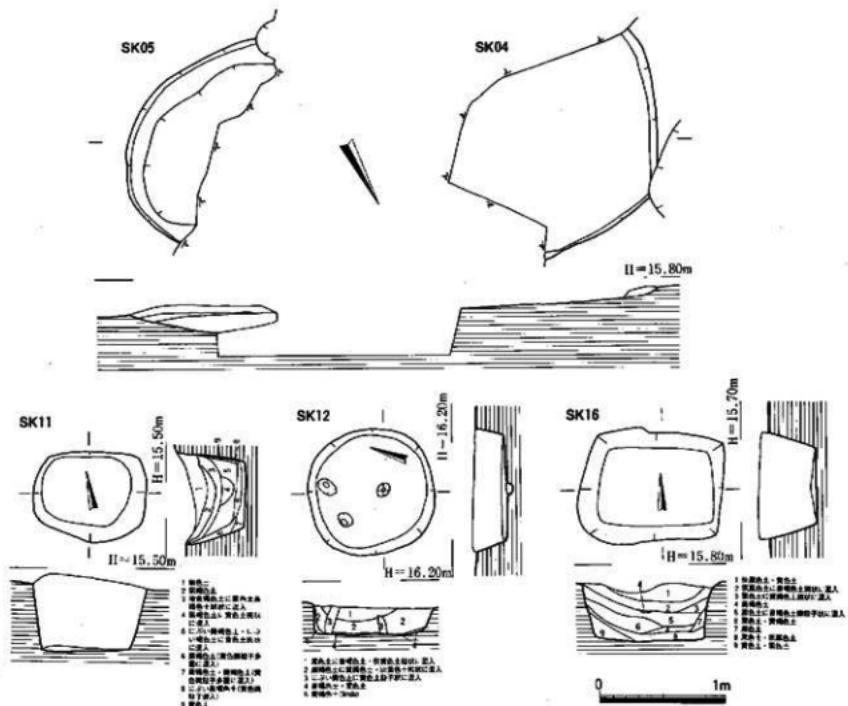
出土遺物 (第26図)

84は土師器の碗の底部片である。内外面ともにわずかに研磨痕が残るが、大半は磨滅する。白色砂粒を含み、白橙色を呈する。85は須恵器の高台付碗の底部片である。底部はヘラ切り未調整で、低い高台が付く。白色砂粒を含み、白灰色を呈する。86は土師器で二重口縁壺の口縁部片である。口縁は屈曲部から直立する。復元口径35.4cmを測る。器壁は府誠が著しく、調査不明である。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、明黄褐色を呈する。87は上師器の大甕の胴部片である。台形状の突帯が巡り、頂部には刷毛目状の工具で刻目が施される。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多量に含み、橙色を呈する。88は黒曜石製の石鎌である。一部欠損するが、主要剥離面を残し、刃部に丁寧な二次剥離を行っている。長さは3.1cm、幅2.1cm、最大厚5mmを測る。重さは2.48gである。他に土師器の高台脚部、壺底部片が出土する。

5) 土坑

SK04 (第27図、図版13)

調査区の中央に位置し、産廃の搅乱により大きく削平されている。平面プランは楕円形を呈すると考えられ、深さは10cmを測る。深さに違いはあるが、SK05と同一遺構の可能性がある。覆土は黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混ざりである。遺物は弥生土器小片が出土している。



第27図 SK04・05・11・12・16実測図 (1/40)

SK05 (第27図、図版13)

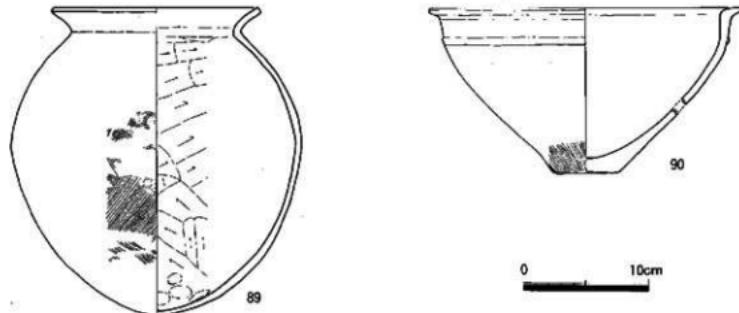
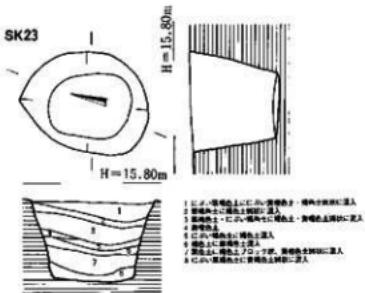
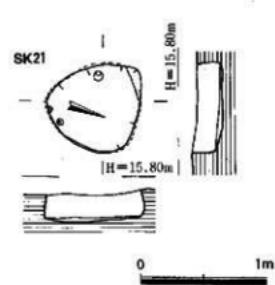
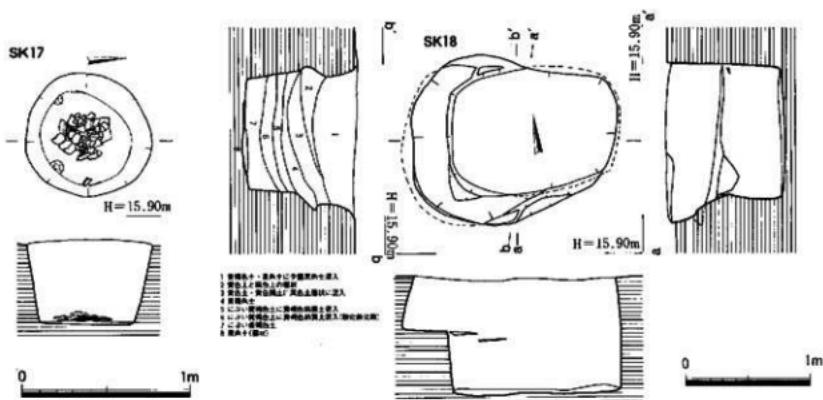
調査区の中央に位置し、産廃の搅乱により大きく削平されている。平面プランは楕円形を呈すると考えられ、深さは最も深い部分で20cmを測る。SK04と同一遺構の可能性がある。覆土は上層に黒褐色粘質土、中層に黒褐色シルト・黄色シルトを挟み、下層はSK04と同じ黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混ざりである。遺物は弥生時代前期の研磨調整を施した壺の胴部片が出上している。前期土器は他の遺構、遺構検出時にも少量ながら出土している。他にこの時期と位置づけられる遺構は検出していないが、SK05は弥生時代前期と考えられる。

SK11 (第27図)

調査区の中央に位置し、SX27の小ピットを切っている土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ90cm、幅70cm、深さは50cmを測る。覆土は自然堆積を呈する。遺物は出上していない。

SK12 (第27図)

調査区の中央、SC01の西側に位置する。平面プランは直径1mのほぼ正円形をなす。深さは23cmを測る。底面には径10~15cmの小ピットを3個検出した。深さは5~10cmを測る。覆土は主に上層が黒色土、下層が黒褐色土で、自然堆積状を呈する。遺物は弥生時代の平底の底部小片が1点出上している。



第28図 SK17・18・21・23実測図 (SK17は1/30、他は1/40) および出土遺物実測図 (1/4)

SK16 (第27図、図版13)

調査区の中央、SC15のはば西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅0.85cm、深さは45cmを測る。覆土は自然堆積を呈する。遺物は出土していない。

SK17 (第28図、図版13)

調査区の中央北壁側に位置する。平面プランは直径1mのはば正円形をなす。深さは66cmを測る。底面壁際には5ヶ所、斜め方向に径10cm、深さ6~10cm程の小ビットを検出した。床面中央には布留甕が潰れた状況で出土した。覆土は上層10cmが黒褐色土に黄褐色土が粒状に混入し、下層は黒褐色土に黄褐色土が斑状に混入している。自然堆積を呈する。遺物は他に布留甕の口縁部片が1点出土する。出土遺物より土坑の時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

出土遺物 (第28図)

89は上師器の壺である。球胴形の体部に頸部がしまり、口縁部が短く外反する。端部内面には段を有する。外面中位には斜方向の刷毛目が残る。角閃石、金雲母を含み、外面は黄橙褐色、灰墨色、内面は褐色を呈する。

SK18 (第28図、図版14)

調査区の中央北壁側、SK17の東側に位置する。平面プランは長さ1.6m、最も幅広な部分で1.3mを測る。やや西側の幅が広い隅丸方形を呈する。西側は段掘りをなす。壁面は部分的にやや袋状となり、深さは90cmを測る。下層では黒色土が厚さ1cmの層状で、部分的に堆積している。この黒色土には炭化物が多く含まれる。遺物は少量であるが、弥生土器の鉢が下層から出土している。時期は弥生時代中期と位置づけられる。

出土遺物 (第28図)

90は弥生土器の鉢の破片である。復元口径25cm、器高13cm、底径5.3cmを測る。底部は平底を呈し、口縁部はゆるい逆「L」字状を呈する。口縁部下位に三角突帯が1条巡る。白色砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。器壁は磨滅し、底部外間に刷毛目調整が残る。他に弥生土器の小片が少量出土する。

SK21 (第28図、図版14)

調査区の西側、SC24を切っている土坑である。平面プランは径70cmを測り、やや北側が幅広な円形をなす。深さは23cmを測る。壁面はやや袋状を呈する。SK12、SK17同様、底面には径5cm前後の小ビットを3個検出した。壁際に向かって斜め方向に深さ10cm程掘り込んでいる。遺物は出土していない。

SK23 (第28図、図版14)

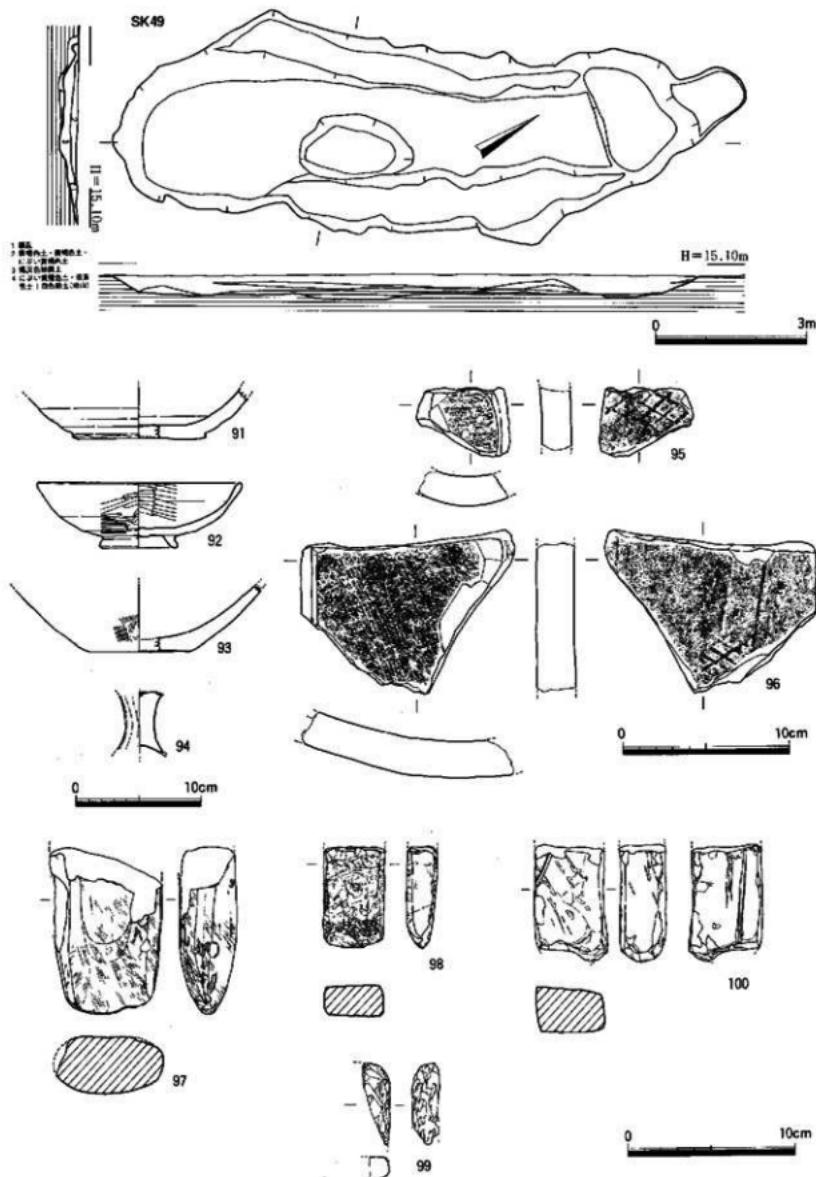
調査区中央、SC24の南側に位置する。平面プランは南北に長い楕円形を呈する。長さ1m、幅80cm、深さ70cmを測る。覆土は黒褐色土、褐色土が帶状に堆積している。遺物は弥生土器の甕の胴部片、玄武岩製の石斧小片が出土する。

SK49 (第29図、図版14)

調査区東側に位置する。南北に細長い溝状を呈する。長さは12.4m、最も幅広な部分で4mを測る。東側、西側は段状をなし、中央部と北側部分で最も深くなってしまおり50cmを測る。覆土は上層が黒褐色土が主体で、下層は褐灰色粘質土である。遺物は須恵器土器、黒色土器、白磁、青磁、染付、瓦が出土する。混入と考えられる土師器、弥生土器、磨製石斧、細粒砂岩製の低石、黒曜石片も多数出土する。出土遺物から中世後半と考えられる。

出土遺物 (第29図、図版21)

91は須恵器壺の底部片で、復元底径10.6cmを測る。底部は回転糸切り底である。92は土師器碗である。復元口径16.2cm、器高5.2cm、底径6.2cmを測る。底部はハラ切り未調整で、口縁部は体部中位か



第29図 SK49実測図 (1/100) および出土遺物実測図 (91~94は1/4、他は1/3)

らやや外反する。外面には研磨痕が残る。少量の金雲母、白色砂粒を含み、色調は白黄色を呈する。93は土師器の底部片である。白色砂粒を多量に含み、淡橙色を呈する。94は上師器の高坏の脚部片である。金雲母、白色砂粒を含み、褐色を呈する。95・96は平瓦の小片である。95の凹面には布目が残る。凸面の中火部に格子目印きが見られ、外側はナデで整形する。格子目印きも一部ナデ消している。96も同様である。97~100は石器である。97は硬質砂岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。全面研磨により丁寧に整形されている。刃部には敲打の痕跡が残り、抉りが1.1cmの幅で入る。その部分も丁寧に研磨されている。現存で長さ10cm、幅6.7cm、厚さ3.4cmを測る。重さは344.26g+aである。98はシルト岩製の磨製石斧である。基部は欠損する。敲打により整形され、研磨で丁寧に仕上げられている。現存で長さ6cm、幅3.7cm、厚さ1.9cmを測る。重さは79.24g+aである。99は柱状片刃石斧の基部片である。石材は砂岩質のホルンフェルスで、白色を呈する。研磨で調整されていると思われる。厚さは1.5cmを測る。100はシルト岩製の砥石である。上下端は欠損しているが、側面は全て砥面として利用されている。幅2mm程の溝をもった砥石である。他にも細かい擦痕が砥面に多く入る。現存で長さ7.1cm、幅4.3cm、厚さ2.7cmである。他に白磁、青磁、褐釉陶器の小片が出土する。

SK58（第31図、図版14）

調査区の西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。長さ1.15m、幅85cm、深さ14cmを測る。底面中央には径45cmのピットを検出した。深さは45cmを測る。建物の柱穴と考えられるがこれに対応する柱穴を検出できなかった。遺物は出土していない。

SK59（第30図、図版15）

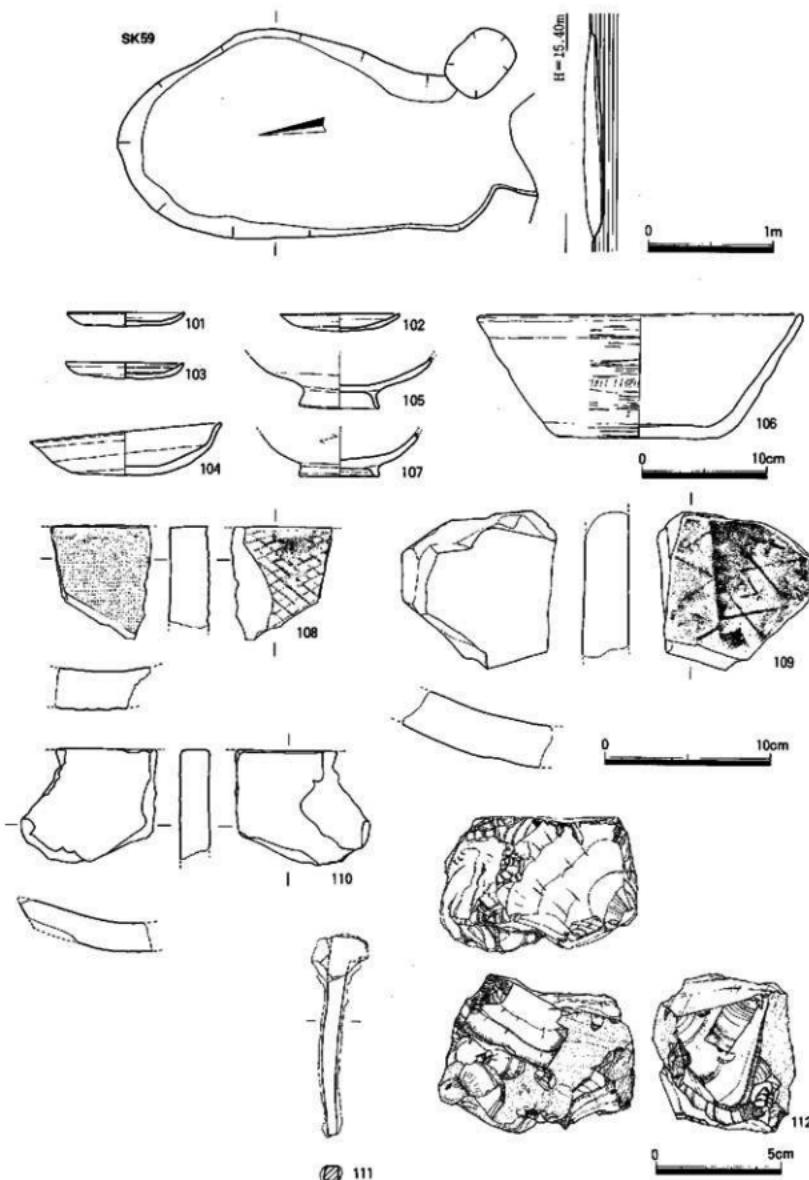
調査区の西側、SC28の南東側に位置する。南側は削平を受け、プランが不明瞭である。現存で長さ3m、幅1.7m、深さは15cmを測る。白磁片、土師器、黒色土器、瓦、鉄製釘が出土する。小破片であるが、白磁小皿、染付が出土していることからSK59は中世後半の時期と考えられる。

出土遺物（第30図、図版21-22）

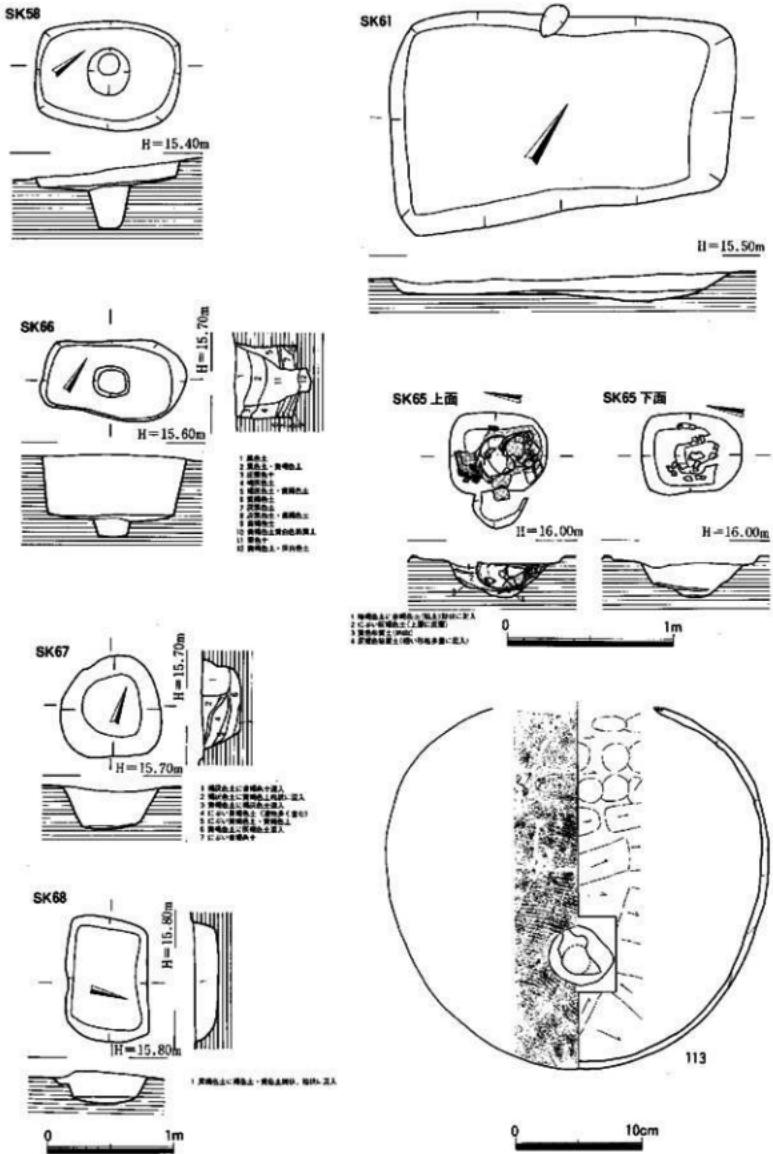
101~106は土師器である。101~103は小皿で、口径9.4cm、器高1.1~1.3cmを測る。底部はヘラ切り未調整である。101・102は金雲母、白色砂粒をわずかに含み、白黄色を呈する。103は赤褐色を多量に含み、橙色を呈する。104は坏で復元口径15.4cmを測る。口縁部は体部中位から外反する。105は高台付碗の底部片である。104・105は白色砂粒を多く含み、白橙色を呈する。106は鉢で口縁部を一部欠損する。復元口径26cm、器高9.6~10cm、底径13cmを測る。外面は縱方向の刷毛目その後、横方向の刷毛目で調整する。内面はナデと思われる。白色砂粒を多量に含み、橙色を呈する。107は瓦器碗の底部片である。器壁は荒れているが、内外面ともに研磨痕が残る。細かい金雲母を多量に含み、内外面ともに黒色を呈する。108~110は平瓦である。108の凹面には布目、凸面には細かい格子目印きが見られる。109の凹面はナデで整形し、凸面に格子目印きを施し、部分的にナデしている。白色砂粒を含み、色調は淡橙色を呈する。110は両面ともナデで整形する。111は鉄釘である。角釘で、頭部を曲げていると思われる。112は焦曜石の石核である。原石は角礫で、断行の色調は漆黒色を呈し、気泡が多い。不純物も多く含まれ、腰岳産のものと思われる。自然面を多く残し、剥離の方向は一定ではない。バティナは古い様相を呈し、縄文時代の可能性がある。長さは5.5cm、幅7.9cm、厚さは6.3cmを測る。重さは304.08gである。他に白磁小皿、染付の小片が出土する。混入と考えられる弥生土器、上師器、黒曜石片が多く出土した。

SK61（第31図、図版15）

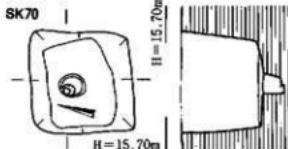
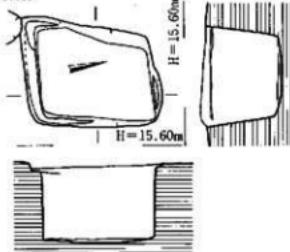
調査区の中央、SK58の東側に位置する。平面プランは長方形を呈し、長軸2.65m、短軸1.4~1.7mを測る。東側は掘りすぎているため、やや深くなっているが、本来は深さ10cmの平らな底面を呈して



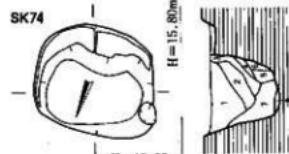
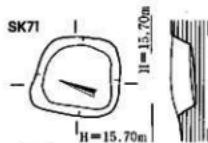
第30図 SK59実測図(1/40)および出土遺物実測図(101~107は1/4、108~110は1/3、他は1/2)



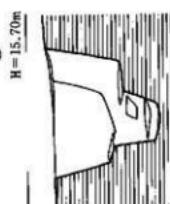
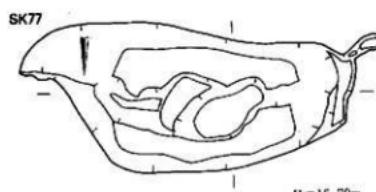
第31図 SK58・61・65～68実測図 (65は1/30、他は1/40) および出土遺物実測図 (1/4)



- 1 朝食は「朝ごはん」、夕食は「夕ごはん」
 - 2 に「おはよう」、「おやすみ」
 - 3 に「おはよう」、「おやすみ」に「おはよう」、「おやすみ」に「おはよう」、「おやすみ」
 - 4 「朝食」
 - 5 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 6 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 7 に「おはよう」
 - 8 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 9 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 10 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 11 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 12 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 13 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 14 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 15 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 16 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 17 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 18 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 19 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」
 - 20 「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」、「朝食」、「朝ごはん」



- #### 1. 黒鶴色土に褐色土・に赤い褐色土調和に導入



1

10

第32図 SK69~71・74・77塞測図 (1/40)

いたと考えられる。遺物は土師器片が少量出土する。

SK65 (第31図、図版15)

調査区の西側、SK58の南東側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ60cm、幅46cmを測る。南側が1段深くなり、北側で14cm、南側で20cmを測る。中央に甕の胴部片が出土し、その周辺には大量の焼土、北側では炭化物をまとめて検出した。特に炭化物は2層（第31図）の上層に厚さ2cm程層になって堆積していた。甕は一部削れた状態で下層からも出土した。出土遺物から古墳時代初頭に位置づけられる。

出土遺物 (第31図、図版22)

113は土師器の甕で、口縁部を欠損する。最大胴部径30.4cmを測り、ほぼ球状を呈する。外面には叩き痕が残り、頸部付近はナデ消している。内面上半は指ナデ、下半はケズリで調整する。胴部下位に焼成後の穿孔が見られる。胎土には角閃石、白色砂粒を多く含み、外面はにぶい黄褐色、内面は灰褐色を呈する。

SK66 (第31図、図版15)

調査区の南側、SC63の東側に位置する。平面プランは東西に長い隅丸方形を呈し、長さ1.15m、幅55~65cmを測る。深さは30cmを測り、底面中央には径25cmの柱穴がある。土層では検出面から柱痕が確認できる。また柱の周囲を版塗状に突き固めている。遺物は土師器の小片が出土する。

SK67 (第31図、図版15)

調査区の中央、SC24の南側に位置する。平面プランは径80cmの円形を呈する。深さは30cmを測る。中層からは布留壺、混入と考えられる弥生土器片が出土する。

SK68 (第31図、図版16)

調査区中央、SK67の西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1m、幅63cm、深さ25cmを測る。覆土は黒褐色土に褐色土・黄色土が粒状、斑状に混入している。遺物は出土していない。

SK69 (第32図、図版16)

調査区の南側に位置する。平面プランは方形を呈し、長さ1m、幅80cmを測る。南側にわずかな段をもち、深さは60cmを測る。壁はほとんど直立する。覆土は上から黒褐色土、にぶい黄褐色土、下層は黒褐色土となる。遺物は出土していない。

SK70 (第32図、図版16)

調査区中央、SK68の南側に位置する。平面プランは一辺82cmの正方形を呈する。深さは65cmを測る。床面中央には径20cmのビットが検出される。土層では下層から柱痕の痕跡が発見されるが、中層、上層では覆土は自然堆積を呈する。遺物は弥生土器の小破片が出土する。

SK71 (第32図、図版17)

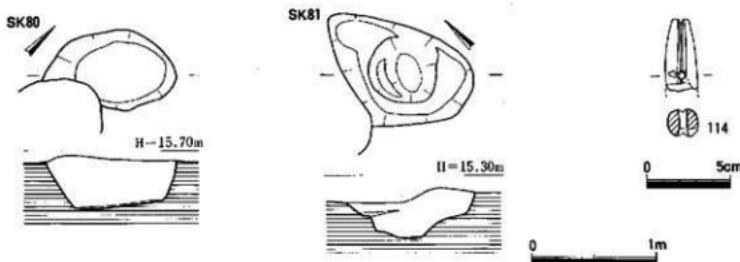
調査区の中央SB79の北側に位置する。平面プランは一辺60~65cmの隅丸方形を呈する。深さは18cmを測るが、約10cm程掘りすぎており、本来10cm足らずしか遺存してなかったと考えられる。覆土は黒褐色土に褐色土、にぶい褐色土が斑状に混入する。遺物は弥生土器の小片が出土する。

SK74 (第32図、図版16)

調査区の南側、SB79の南側に位置する。平面プランは隅丸方形をなし、長さ95cm、幅85cmを測る。南側には浅い段が付き、深さは65cmを測る。遺物は出土していない。

SK77 (第32図、図版17)

調査区の南側、SB79の東側に位置する。平面プランはいびつな楕円形を呈し、最も長い部分で2.6m、幅1.2mを測る。段掘り状となり、最も深い部分で、85cmを測る。底部は凸凹状である。覆土



第33図 SK80・81実測図 (1/40) および出土物実測図 (1/3)

はにぶい黄褐色土、黄色土が主体で、自然堆積の状況を呈する。他の遺構と較べ、覆土は非常に堅く、締まっていた。下層からは旧石器時代末の細石刃が出土する。他に遺物は出土しなかった。覆土の状況、出土遺物から旧石器時代の落し穴の可能性も十分に考えられる。遺物については「9) IH石器時代の遺物」で後述する。

SK80 (第33図)

調査区の中央、SK67に切られている遺構である。平面プランは梢円形を呈し、長さ1.05m、幅65cm、深さ40cmを測る。底はわずかに凸凹状となる。覆土はSK77と類似し、非常に堅く、締まっていた。遺物は出土していない。

SK81 (第33図)

調査区の西側、SC28に切られている土坑である。上部はSC28に切られ、深さは36cmを測る。弥生上器の小片と共に、滑石製の石錐が出土する。

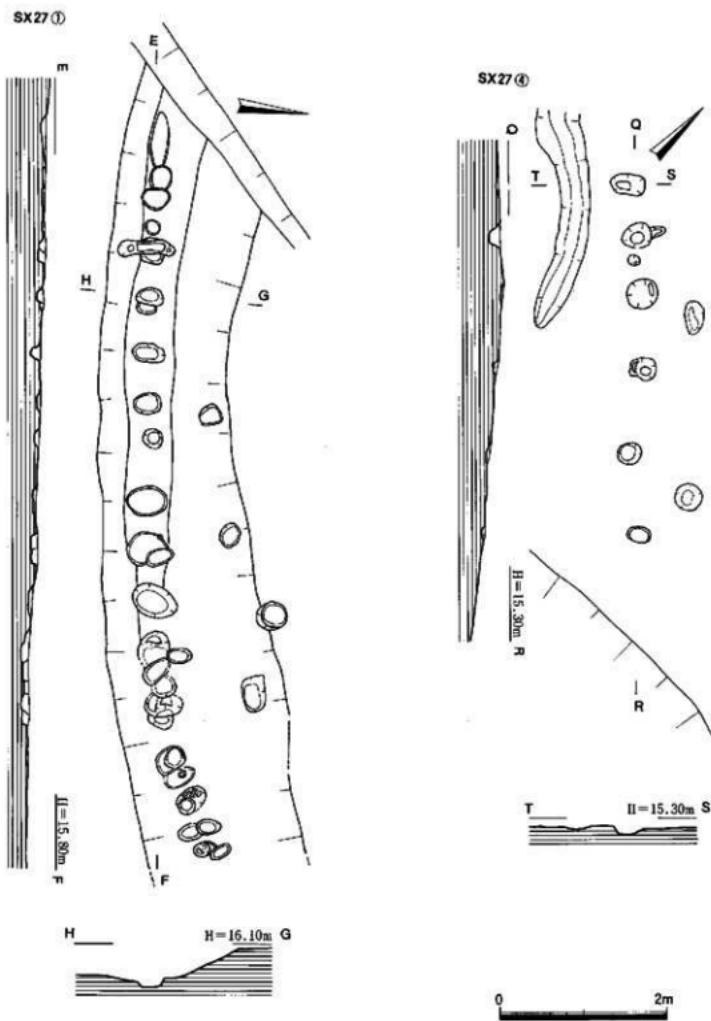
出土遺物 (第33図、図版22)

114は滑石製の錐である。基部は欠損し、横断面は円形を呈する。基部近くに孔を有し、幅広で深い溝が全周する。丁寧な研磨で仕上げている。現存で重さは19.79g+αである。

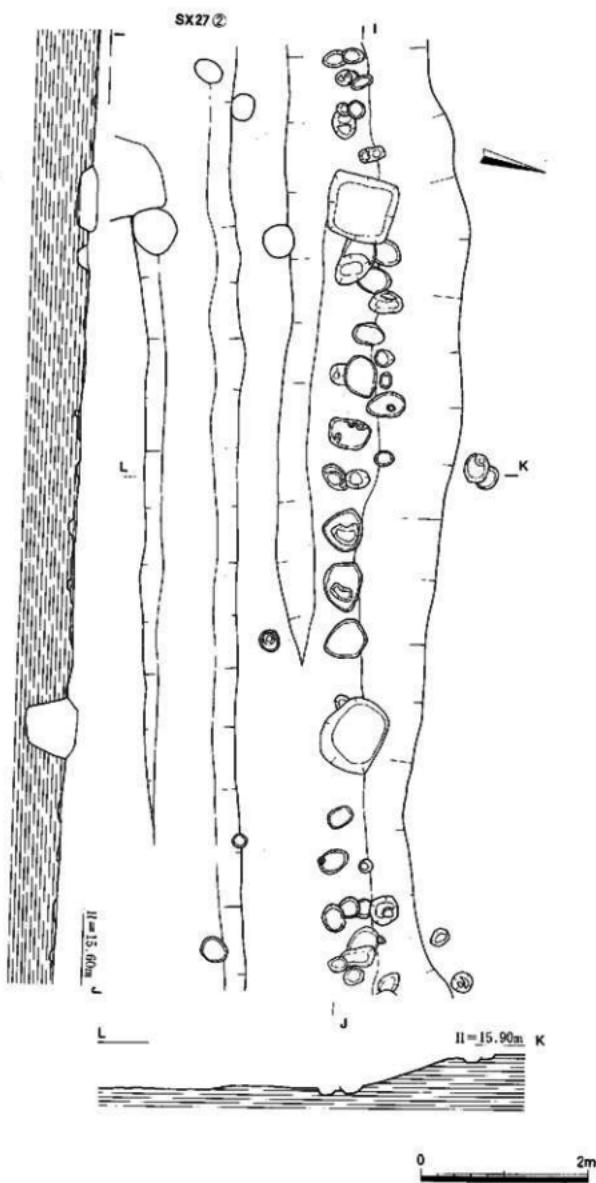
6) 道路状遺構

SX27 (付図、第34~36図、図版18)

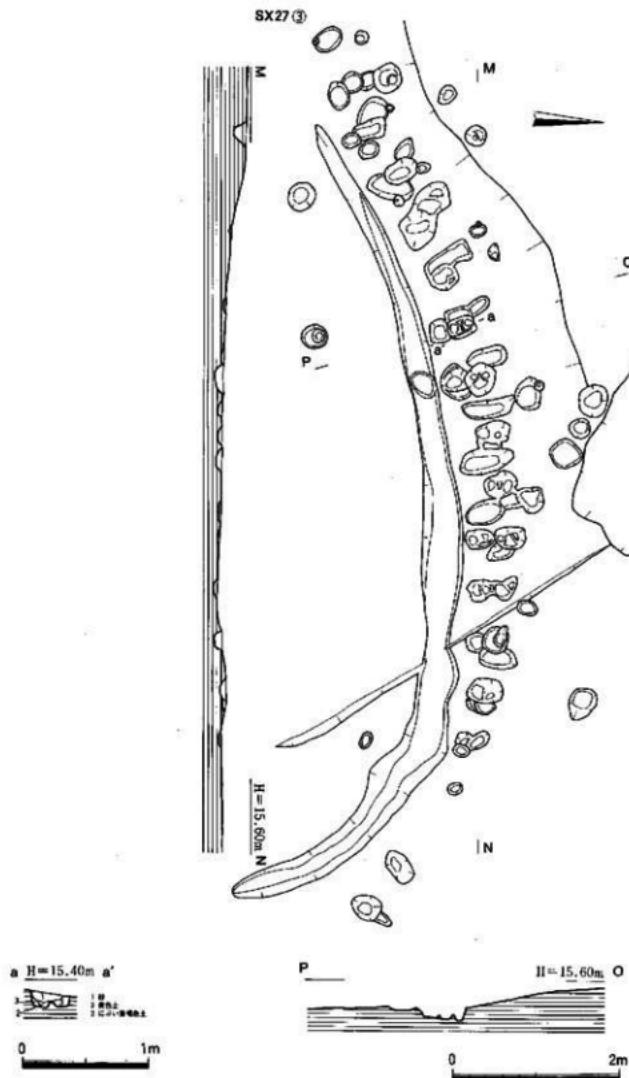
調査区の中央、SC01・SC13の南東側、SX53の南西側に位置する。北西側は調査区外に続く。調査区内ではSC01の西側から始まり、わずかに弧を描きながらN-105°-Wの方向でSC01・SC13の南東側を通る。SX55付近でN-134°-Eへと方向を変え、谷に降りていくものと考えられる。SX55付近から南東側は削平が大きくなり、ピットも深いものだけが遺存しているため、間隔が粗になる。全長約35mを検出した。いわゆる波板状遺構で、ピット、溝状のピットが連なっている。ピットの大半は深さ15cmにも満たない。褐色、茶色、灰褐色の土の中に灰色砂が混入している。灰色砂は転圧された痕跡と考えられる。また、底面にも10cmにも満たない円形の圧痕が観察できる。また、1トレンチからはこの波板状遺構の直上に暗褐色粘質土(第6図中央上層-3層)が厚さ8cm程堆積している。道路を舗装していた土の可能性も考えられる。出土遺物は大半が弥生上器の小破片である。出土遺物は少なく、須恵器の小破片3点、染付細片1点、上師器小片である。この遺構の時期であるが、古墳時代の住居を削平していることからこの時期より新しいことは確実である。1点ではあるが、染付が出土しており、中世に入っているものであると考えられる。



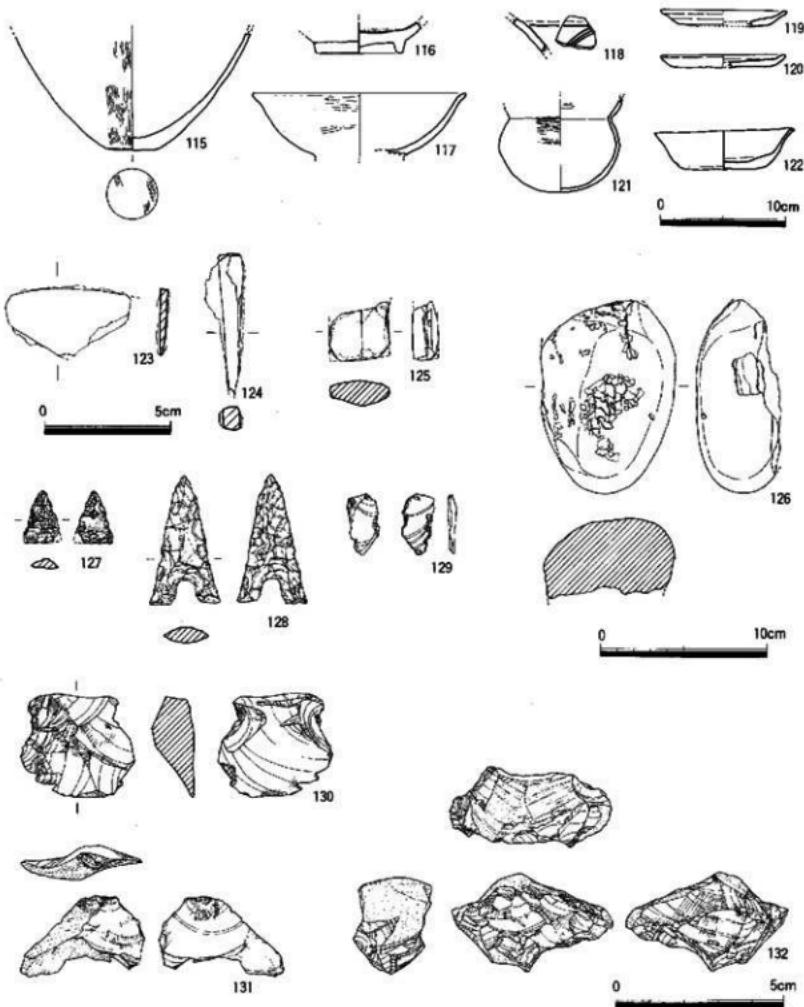
第34図 SX27波状構造実測図① (1/60)



第35図 SX27波板状造構実測図② (1/60)



第36図 SX27波板状造構実測図③ (1/60) およびピット上層図 (1/40)



第37図 SP出土遺物実測図 (115~122は1/4、123~125は1/2、126は1/3、他は2/3)

7) ピット出土遺物 (第37図、図版22)

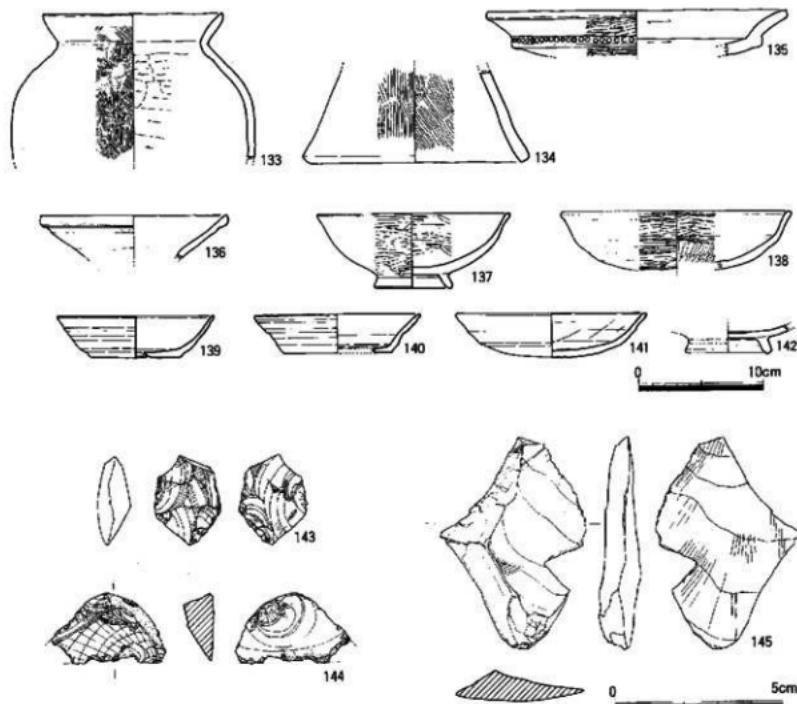
115はSP116・117出土で、弥生土器の底部片である。底部は平底状を呈し、一部刷毛目調整が残る。白色砂粒を多量に含み、褐色を呈する。外面には煤の付着がある。116はSP196出土で、白磁の底部片である。底部内面は輪状に釉を掻き取る。淡黄橙色の胎土に黄味を帯びた白色釉が施釉される。外面は露胎である。117はSP211出土で、瓦器碗の口縁部片である。復元口径17cmを測る。細かい金雲母

を多量に含み、内外面ともに黒色を呈する。研磨痕は不明瞭である。118はSP385出土で、弥生土器の壺の肩部片である。頸部付近に段を有し、直下に1条の沈線を巡らし、その下位に3条の弧文を施す。金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。119・120はSP450出土で、上師器の小皿である。復元口径10cm、器高1cmと1.3cmを測る。細かい金雲母を含み、119は淡橙色、120は灰橙色を呈する。121はSP503出土で、土師器の小型丸底壺である。口縁端部が欠損する。頸部外面に細かい刷毛目調整が残るが、他は丁寧な横方向の研磨で仕上げる。胴部内面は丁寧なナデ調整、口縁内面は研磨調整を施す。胎土も精良で、細かい金雲母、赤褐色、白色砂粒を含む。内外面ともに明橙色を呈する。122はSP587出土で、土師器の壺である。復元口径11.2cm、器高3.2cmを測る。金雲母、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。123はSP121出土で、鉄鎌の刃部片である。124はSP211出土で、鉄釘である。125はSP380出土で、石劍の基部と考えられる。砂岩製で、大半は欠損する。側面には一部研磨痕が残る。126はSP228出土で、打欠石錐である。側面に浅い抉りが対に入る。また、表面に敲打痕が多く残り、中央がやや歪んでいる。幅は15.9cmを測り、重さは618.54gである。127はSP01出土で、黒曜石製の石鎌である。黒曜石は不純物を少量含み、にぶい黒色を呈する。小型の平基無茎石鎌で、基端を片方欠損する。細かい剥離により整形され、裏面中央部は研磨調整されている。長さ1.1cm、厚さ0.3cmを測る。重さは0.41gである。128はSP68出土で、安山岩製の石鎌である。完形品の円基無茎鎌で、いわゆる鎌形鎌である。長脚で、全面丁寧な剥離によって整形されている。長さ3.8cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測る。重さは2.46gである。129はSP243出土で、黒曜石の使用痕のある剥片である。非常に小型のものである。自然面は残っておらず、断口からは半透明の黒色と白色を帯びた黒色が輪様になっている様子が観察できる。不純物を多く含む。側面には細かい剥離がみられる。長さは1.8cm、幅1cm、厚さは0.3cmを測る。重さは0.42gである。130はSP417出土で、石匙状の剥片である。黒曜石製で、基部は横からの剥離によってつくり出されている。刃部には使用した痕跡はみられない。黒曜石は不純物をわずかに含むが、断行の色調は漆黒色を呈する。長さは3.1cm、幅3.4cm、厚さは1.3cmを測る。重さは11.23gである。131はSP270出土で、黒曜石の自然面を残す横長の剥片である。自然面は海綿状を呈し、不純物をほとんど含まず、断行の色調はにぶい黒色を呈する。二次加工を行っておらず、使用痕も見られない。長さは2.4cm、幅3.7cm、厚さは1cmを測る。重さは4.27gである。132はSP49出土で黒曜石の石核である。原石は角礫で、断行の色調は漆黒色を呈し、気泡が多い。不純物も多く含まれる。腰括弧のものと思われる。打面調整の部分に自然面を残すものの、ほとんど全面を剥いでいる。剥離は大半が打面調整面から剥いでいる。長さは2.9cm、幅4.8cm、厚さは2.3cmを測る。重さは24.99gである。

8) その他の出土遺物（第38図、図版22）

大半が造構検出時の遺物である。部分的に焼が緩く落ち込み、底面が凸凹状を呈し、深さ10cm前後を測る落ち込み状の造構が確認された。SX53・SX55がそれにあたる。明確なプランは示していない。

133・134はⅢ区の砂層からの出土である。133は土師器甕で底部が欠損する。器壁は厚く、外面には刷毛目調整、内面にはケズリが残る。金雲母、白色砂粒を含み、にぶい黄褐色を呈する。134は弥生土器の器台である。脚部片で、内外面ともに刷毛目で調整する。金雲母、赤褐色、白色砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。135はⅡ区出土の二重口縁壺の口縁部片である。屈曲部には竹管文を巡らす。口縁端部にも施しているようだが、不明瞭である。外面は横方向の研磨が明瞭に残る。内面は磨滅している。金雲母、白色砂粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。136はⅢ区の砂層出土で、玉縁口縁をもつ白磁の小碗である。胎土は白灰色を呈し、緑味を帯びた淡灰色釉が施される。全面に細か



第38図 その他の出土遺物実測図 (133~142は1/4、他は2/3)

い貫入がみられる。137はT区出土の瓦器碗である。復元口径15.4cm、器高5.9cm、底径6.2cmを測る。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含み、黒色を呈する。内外面に明瞭に研磨痕が残る。138~142はⅢ区の砂層からの出土である。138は黒色上器A類の口縁部片である。外面は横方向の研磨、内面下半は縱方向、上半は横方向の研磨が明瞭に残る。細かい金雲母、白色砂粒を含み、外面は淡橙色・黒色、内面は黒色を呈する。139~141は坏である。底部はヘラ切り未調整で、140・141は板状压痕が残る。いずれも金雲母、白色砂粒を含み、140は赤褐色粒も含む。139・140は明橙色、141は灰白色を呈する。142は土器師の高台付属の底部片で、底部はヘラ切り未調整である。金雲母、白色砂粒を含み、灰白色を呈する。143は黒曜石の使用痕のある剥片である。上面に自然面をのこすが、それ以外は剥離されている。黒曜石は不純物をわずかに含み、断行の色調は黒色を呈する。自然面の状況から原石は角錐である。基端部の右側、左側に細かい剥離を行っている。長さは2.7cm、幅2cm、厚さは1cmを測る。重さは3.56gである。144は黒曜石の使用痕のある剥片である。打面には自然面が残る。自然面の状況から角錐と思われる。不純物を多く含み、断行の色調は黒色を呈し、縞状をなす。打点からの打瘤剥痕が見られ、背面基端部側面に細かい剥離が観察できる。長さは2.1cm、幅3.4cm、厚さは0.9cmを測る。重さは4.51gである。145は安山岩の使用痕のある剥片である。自然面を背面左側面と芯端部右側に残す。背面遠端部右側に剥離を行っている。長さは8.5cm、幅5.8cm、厚さは1.5cmを測る。重さは40.44gである。

9) 旧石器時代の出土遺物（第39図）

本遺跡では4点の旧石器時代資料が出土した。1点を除き、何れも弥生時代以降の遺構から出土しており、本来の包含層を避離したものである。しかし、資料には二次的な傷や摩滅は少なく、元の包蔵地から大きく離れたものとは考え難い。調査区内ではAso4より上位の更新世後期相当のレス層や火山灰層が相当削平されていたために、旧石器時代の包含層は失われたものと考えられた。

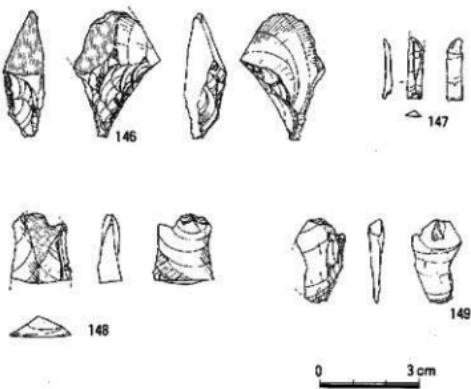
146はSK49内から出土した「原の辻型」台形石器である。本石器は発掘調査時に刃部～中央付近を大きく欠損してしまった。本来は完成品であったとみられる。現存の長さ3.7cm、幅2.5cm、厚さ1.2cm、重さ6.57gを測る。石材は漆黒色弱透明黒曜石であり、原石は僅かに残る自然面から比較的平滑な円錐とみられた。表面の風化は著しく磨りガラス状となっているが、二重バティナなどはない。欠損と二次調整により素材剥片の形状は明確でないが、菱形に近い横長剥片とみられる。二次調整は同器種の製作技術を忠実に守っている。剥片の打面部を基部右側にし、背面からの急角な荒剥離で打面具を除去し、対面となる基部左側は腹面からの急角なプランティング調整で整形する。基部背面は打面側からの平坦剥離を入念に施している。なお背面頂部に僅かに研磨痕が認められるが、これが整形に伴うものかは不明である。残念ながら刃縁部の大半を欠損しているために形態の復元が困難であるが、右上に急傾斜の刃部があり、鉤形の典型的な「原の辻型」になるとは考え難く、左側に大きく振れるか、先端が尖り気味になると推定される。類似した資料は長崎県百花台東遺跡I文化層にある。

147はSK77から出土した細石刃である。この遺構は陥し穴の可能性があり、伴うとすると北部九州では古期の例となる。先端を折断し、基部側を発掘調査時に欠損している。現存の長さ1.8cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gを測る。石材は灰黒色半透明黒曜石である。両側縁は平行し、両端を除去した完成品であったとみられるが、側縁に微剥離などの使用痕は確認できなかった。

148はSE08南側(17層)から出土した縦長剥片である。中位で折断し、基部側を発掘調査時に欠損している。現存の長さ1.1cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ2.26gを測る。石材は漆黒色黒曜石であり、やや風化が進んでいる。

149はSC01上層から出土した剥片である。現存の長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.09gを測る。石材は漆黒色黒曜石であり、原石は僅かに残る自然面から平滑な角錐とみられ、佐賀県腰岳産とみられる。背面には素材剥片の調離面と本剥片調離以前の二次調整時の剥離面がみられる。石核整形や打面調整か、石器製作時の調整剥片とみられる。

以上本遺跡の旧石器時代石器は僅かな資料であるが、後期旧石器時代後半期（146・148）と同終末期（147）の二時期に別れる。今後周辺調査の成果に待ちたい。



第39図 旧石器時代の出土遺物 (2/3)

IV. まとめ

調査ではIH石器時代後半期～終末期、弥生時代前期～中期・終末～古墳時代前期、古代、中世の遺構が確認された。遺物では、绳文時代の石器もピットや他遺構への混入で出土する。

旧石器時代の遺構としてはSK77が陥し穴の可能性がある。細石刃1点のみの出土であるが、覆上の状況も他の遺構とは全く異なる。同じ覆土を呈したSK80も同時期の可能性がある。

弥生時代前期の遺構は土坑（SK04・05）のみであるが、遺物は包含層からも出土している。やや先行するが、西側の笠抜遺跡では帝帯文期の水路が北東から西側にかけて約160m走っている（第3・4図）。水口等も確認されており、寺島遺跡の西側を流れる白水川から水が引かれ、周辺では水田耕作が行われていたと考えられている。寺島遺跡の集落もこの水田耕作を基盤として発達した可能性が考えられる。この水路が埋まるのは弥生時代中期初頭である。その後、笠抜遺跡では当時はもつと西側を流れていた白水川に4箇所の井堰をもつ貯水遺構が築かれる。そこから西側に延びる水路も検出された。この時期から寺島遺跡でも住居を作り集落が造営される。調査区全体に弥生時代中期の遺構が築かれる。検出された遺構は円形竪穴住居5軒（SC03・SC10・SC78・SC101・SC102）、貯蔵穴と考えられる土坑（SK18）である。その後、集落は継続せず、弥生時代後期の遺物はほとんど確認されていない。再び集落が築かれるのは、弥生時代終末から古墳時代前期にかけてである。寺島遺跡ではこの時期の遺構が最も多く、方形の竪穴住居、井戸、土坑が検出されている。まず、弥生時代終末には調査区の西側に方形竪穴住居2軒（SC28・SC63）と井戸1基（SE64）が造営される。方形住居は中央に炉をもち、それを挟んで2本の上柱穴がある。出入口は南向きに造られ、ベットは東西に鉤手状に付設する。次に古墳時代初頭になると調査区中央に方形竪穴住居4軒（SC01・SC13・SC15・SC24）、東端に井戸1基（SE08）が造られる。この時期の遺物が出土する土坑（SK17・SK65）もあり、その内のSK17は底面に小ピットをもつ。このタイプの土坑は他にも検出されており、SK12・SK21がある。土坑の中からは完形の土器や炭化物が出土することから貯蔵穴等の性格が考えられる。住居はやはり南向きに出入りをもち、中央には炉が配置され、それを挟んで柱穴が配される。東西にベット状遺構があると考えられるが、遺存状況が悪く、全体を把握できるものはない。その後、古墳時代前期になると、東側に竪穴住居1軒（SC02）と井戸1基（SE07）を検出した。住居の大半は調査区外へ延びるため、住居の構造は知り得ないが、やや住居の出入口は西側に方向を変えると思われる。前述した笠抜遺跡の水路は古墳時代初頭まで続く。終末期の井戸（SE64）からはよく使用され、陶こぼれを起こしている石包丁（71）や農具未製品（75）が出土している。

白水川を挟んで南側の低丘陵には春日市の御陵遺跡（第3図）が位置する。ここでは古墳時代初頭前後の竪穴住居が3軒検出され、遺構は確認されていないが、弥生時代の遺物である青銅器鑄型が3点出土する。寺島遺跡とはほぼ同時期の遺構、遺物が出土している。また、御陵遺跡のすぐ北側、守島遺跡とは白水川を挟んで約30m南東側に、御陵古墳が位置する（第3・5図）。前方後円墳で、全長約30m、後円部径20m、前方部幅11m、後円部高1.5m、前方部高1.5mを測る。墳丘は削平されていると考えられ、墳形は前方部がわずかに開く発生期古墳の形態に近いと春日市史には記述されている。

このように弥生時代中期、弥生時代終末～古墳時代前期には寺島遺跡の周辺では、笠抜遺跡・御陵遺跡がほぼ同時期に存続し、集落を築いている。谷部に位置し、水田耕作という経済基盤を担った笠抜遺跡とそれを基盤とした北側と南側の低丘陵に位置する寺島遺跡・御陵遺跡という構図が想定される。そのような中、前方後円墳である御陵古墳が築かれたと考えられる。

図 版

寺 島 遺 跡

図版 1



(1) 調査区遠景（西から）



(2) 調査区全景（西から）



(1) I区全景（真上から）



(2) II区全景（真上から）



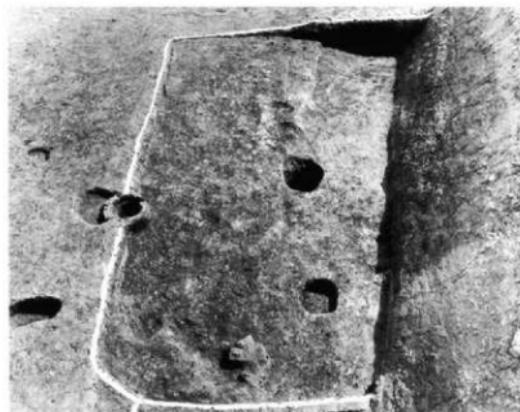
(1) 調査区中央土層断面（西から）



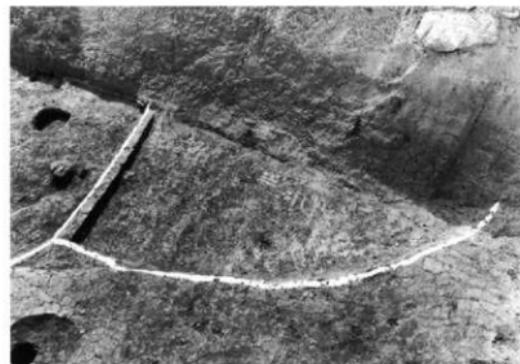
(2) Ⅲ区段落ち状況（北西から）



(1) SC01 (北から)



(2) SC02 (北東から)



(3) SC03 (南東から)

寺 島 遺 跡

図版 5





(1) SC15(東から)



(2) SC15出入口土坑遺物出土状況
(北から)



(3) SC15遺物出土状況(真上から)

寺 島 遺 跡

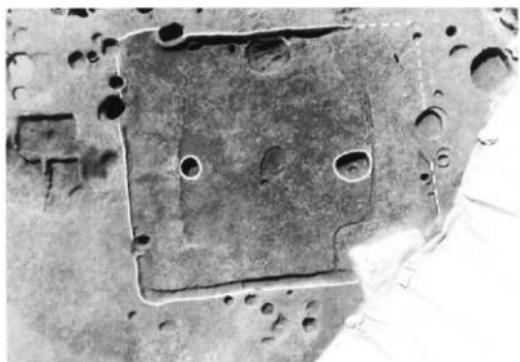
図版 7



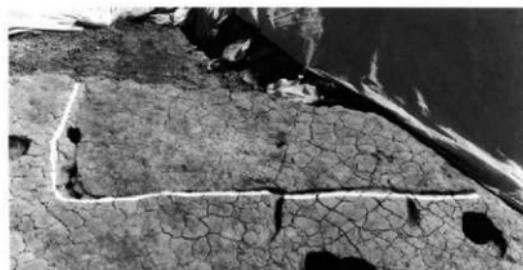
(1) SC24 (北から)



(2) SC24出入口土坑遺物出土状況
(北から)



(3) SC28 (北から)



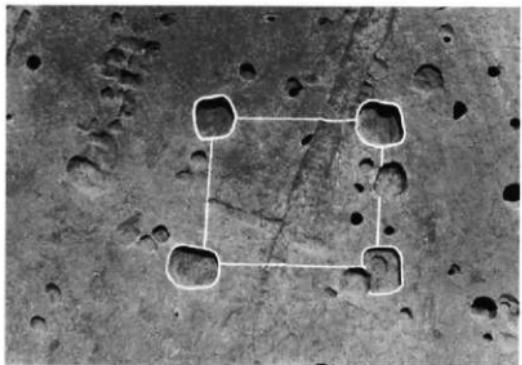
(1) SC63 (北から)

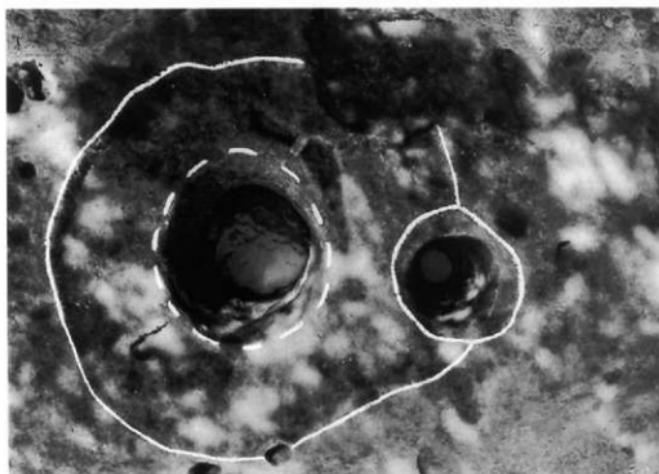


(2) SC63床面遺物出土状況
(西から)



(3) SC63床面遺物出土状況
(東から)





(1) SE07・08 (真上から)



(2) SE07 (南から)



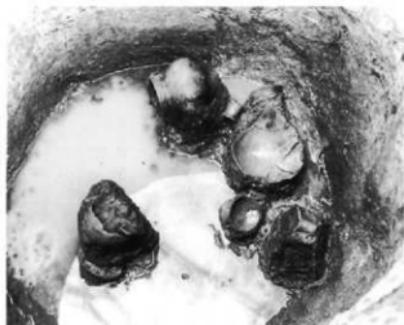
(1) SE08 (北西から)



(2) SE08南側土層断面 (東から)



(3) SE08北側土層断面 (東から)



(4) SE08遺物出土状況 (南西から)



(1) SE64(東から)



(2) SE64(西から)



(3) SD19(北から)



(4) SD51(北から)



(5) SD19①土層断面(南東から)



(6) SD19②土層断面(南東から)



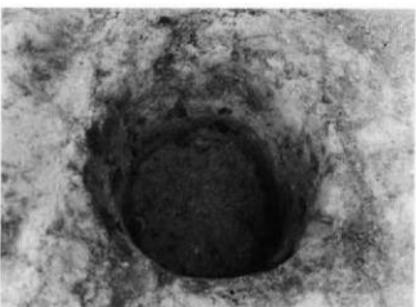
(1) SK04 (北から)



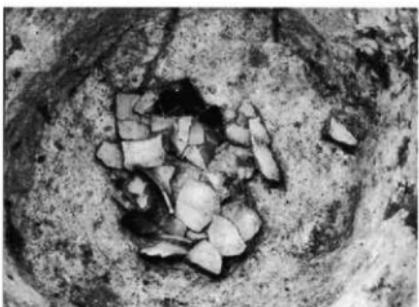
(2) SK05 (南東から)



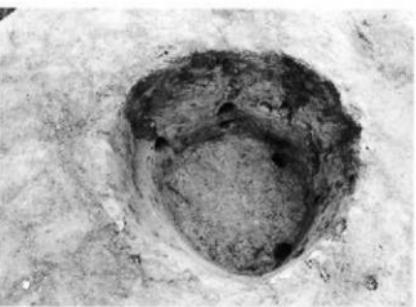
(3) SK16 (北から)



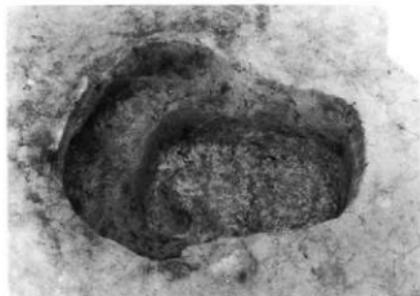
(4) SK17 (西から)



(5) SK17遺物出土状況 (西から)



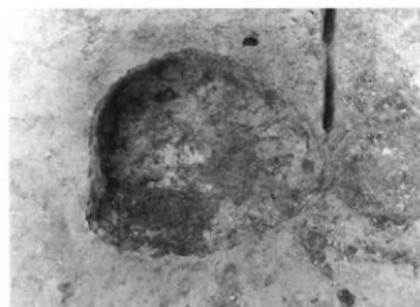
(6) SK17底面小ピット完掘状況 (南から)



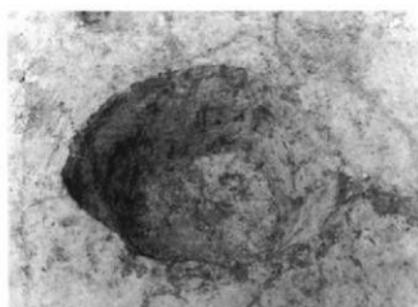
(1) SK18 (南から)



(2) SK18上層 (東から)



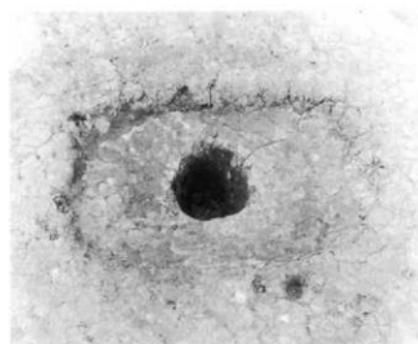
(3) SK21 (西から)



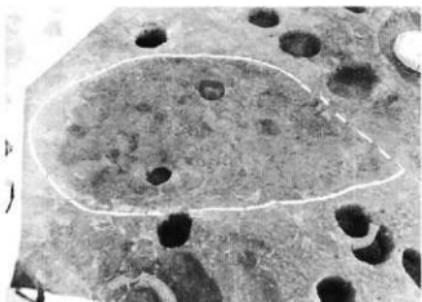
(4) SK23 (西から)



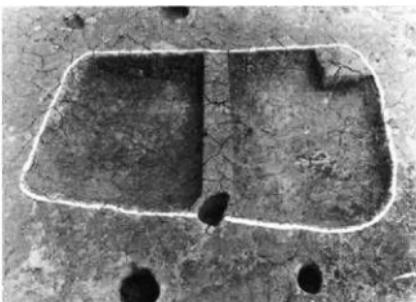
(5) SK49 (北から)



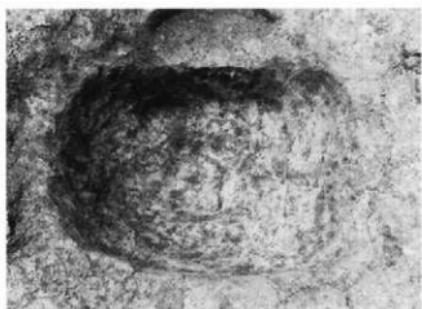
(6) SK58 (南東から)



(1) SK59 (西から)



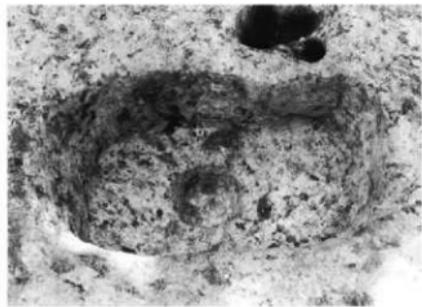
(2) SK61 (北西から)



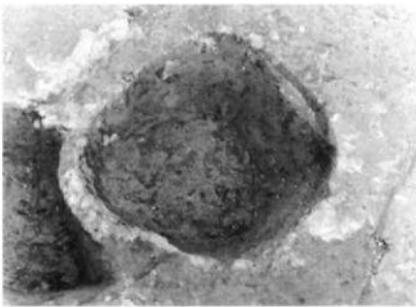
(3) SK65 (東から)



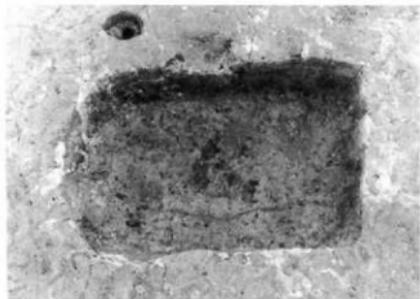
(4) SK65遺物出土状況 (西から)



(5) SK66 (北から)



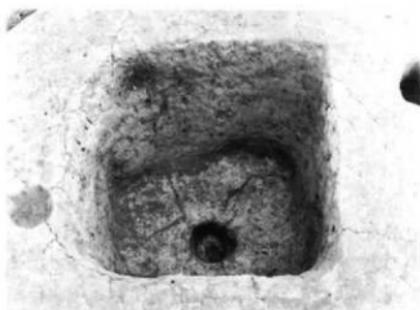
(6) SK67 (南から)



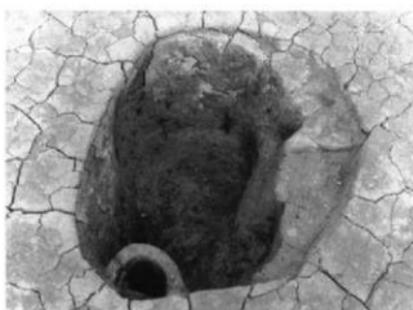
(1) SK68 (北から)



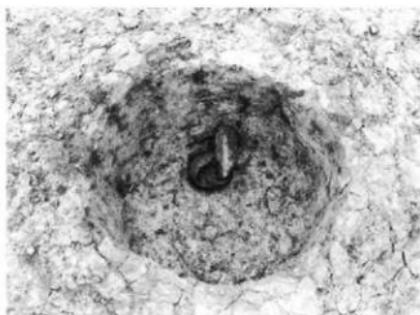
(2) SK69 (西から)



(3) SK70 (北から)



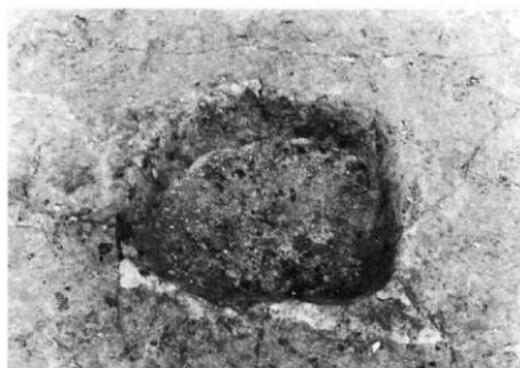
(4) SK74 (西から)



(5) SP503遺物出土状況 (真上から)



(6) SP587遺物出土状況 (真上から)

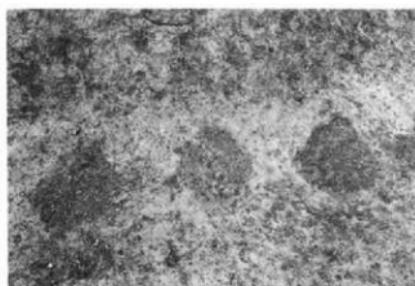




(1) SX27 (真上から)



(2) SX27波板状遺構（西から）



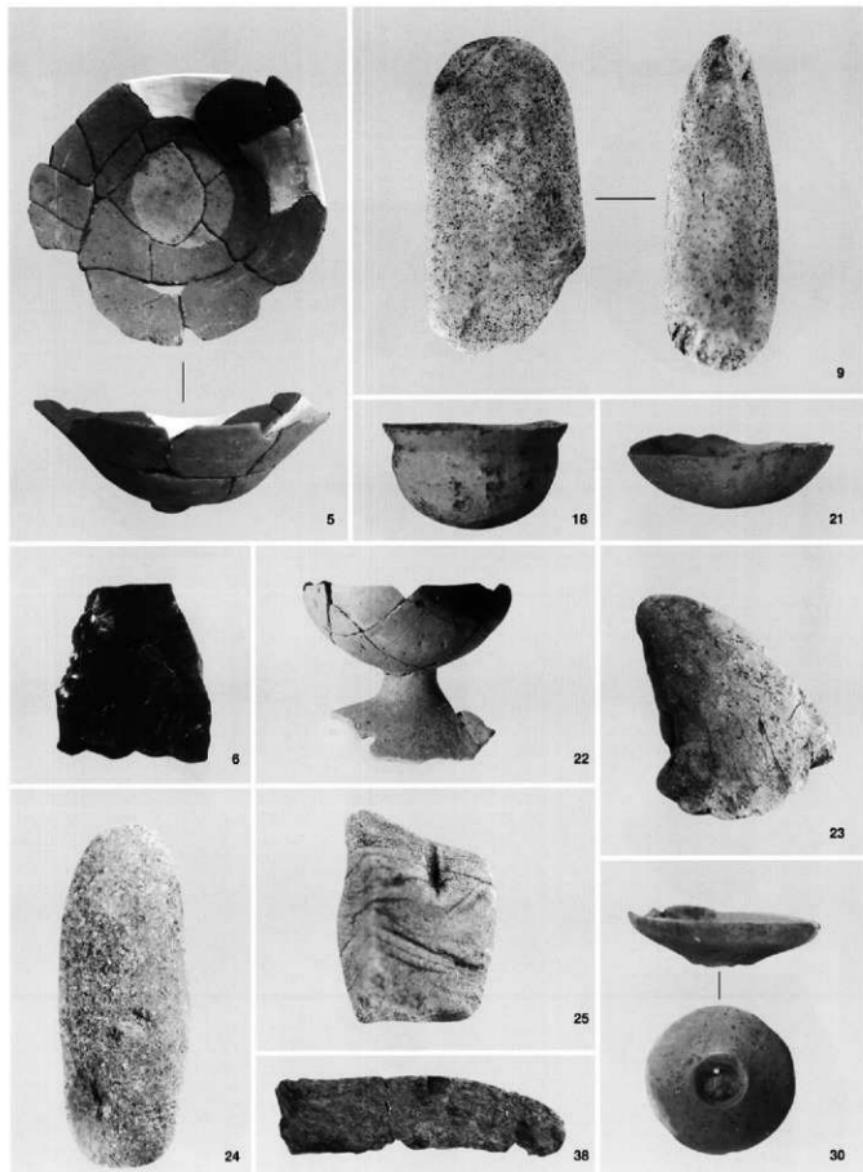
(3) SX27波板状遺構（真上から）



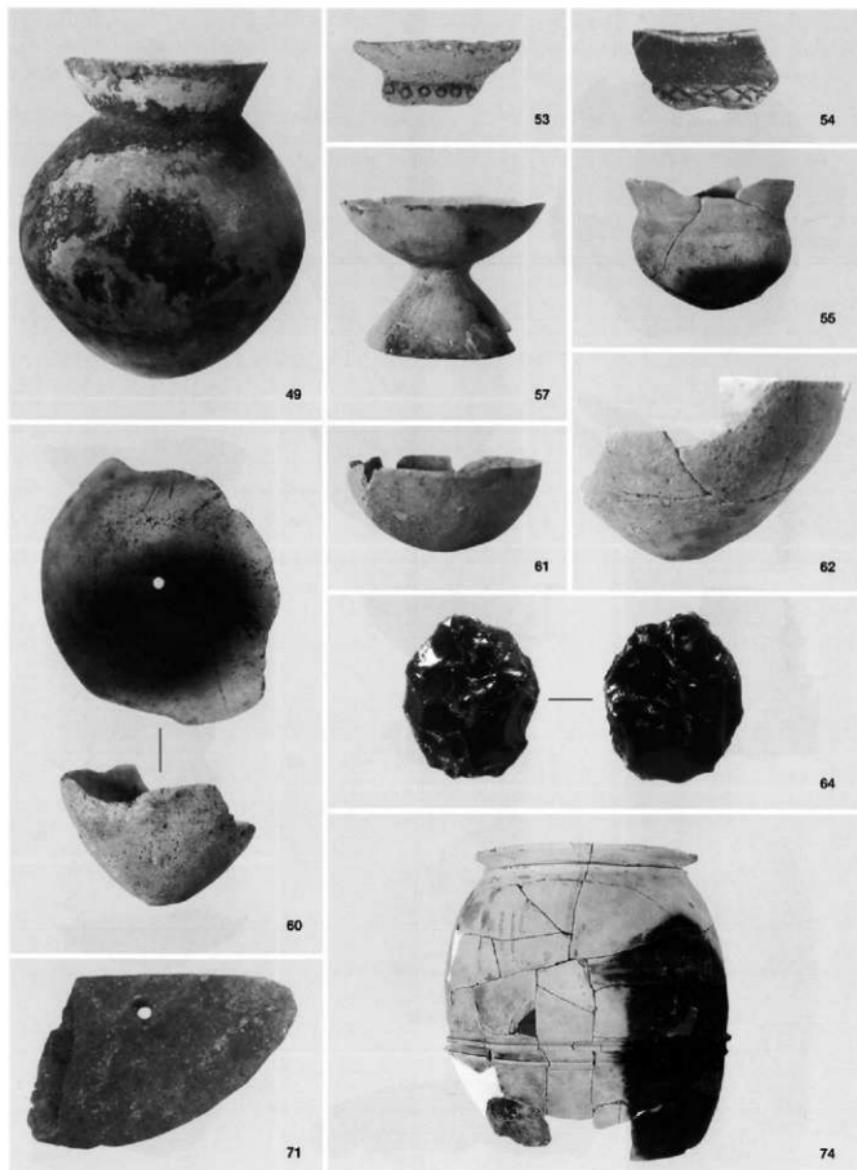
(4) SX27 (西から)



(5) SX27波板状遺構（西から）



出土遺物 I



出土遺物 II



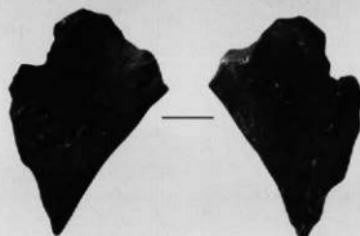
69



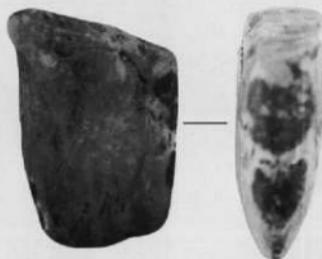
70



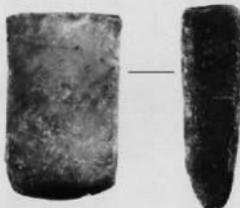
83



86



97



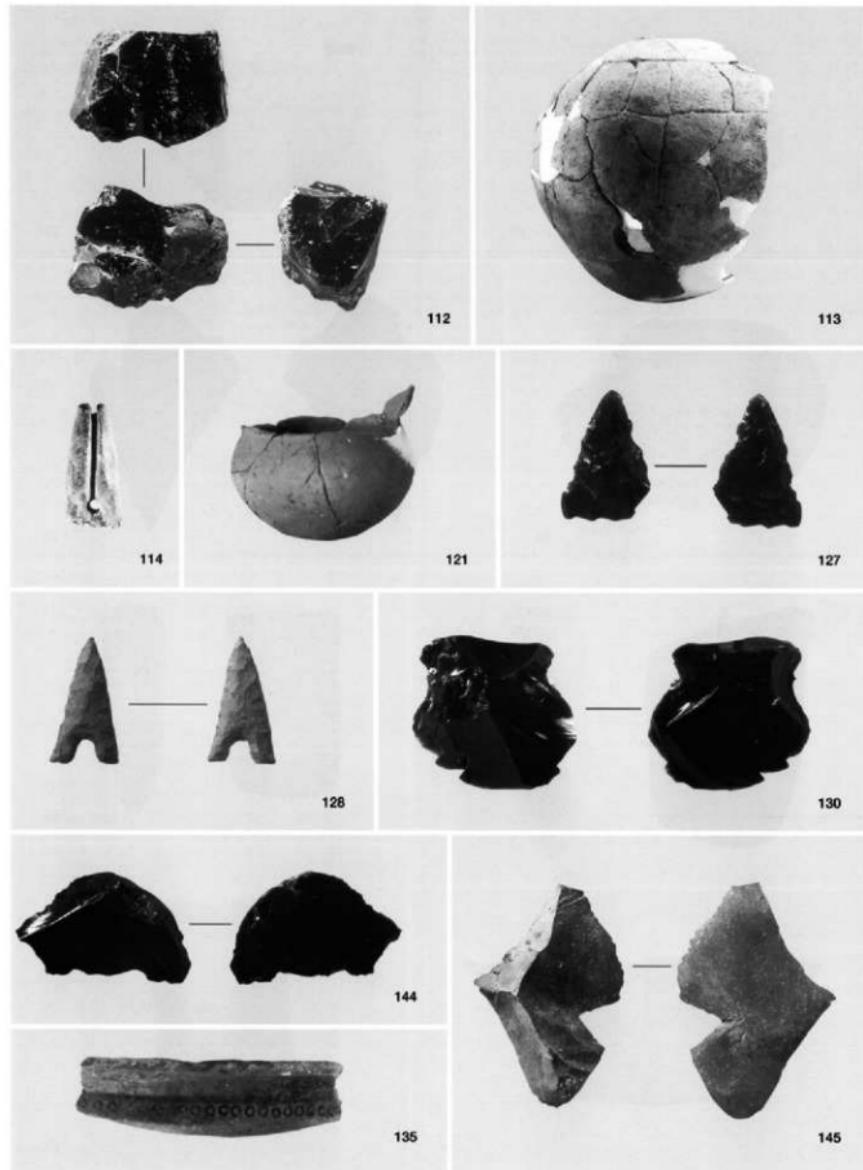
96



106



100



出土遺物IV

寺 島 遺 跡
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第753集—

2003年3月14日

発 行 福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印 刷 石 橋 印 刷 株 式 会 社

福岡市埋蔵文化財調査報告書第753集

『寺 島 遺 跡』

付 図

寺島遺跡遺構全体図(1/200)